サンスクリット美文詩と賛歌
—Bhāravi 作 *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節を中心に—*

山崎　一穂

1　はじめに

11 世紀カシミールの宮廷詩人 Kṣemendra は仏教美文詩 *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (『菩薩のアヴァダーナの如意の蔓草』) 第 73 章 Nāgadūtapreṣaṇa (「龍への使者の派遣」) をアショーカ王の龍調伏伝説の叙述にあてている。同章は韻律 anuṣṭubh を基調とする 28 の詩節からなり、その物語材源が、チベット大蔵経テンギュル書翰部にテキストが完全な形で残る *Aśokamukhanāgavinayapariccheda* に最も近いことは拙論で指摘した通りである[2]。Kṣemendra はこの物語の筋を忠実に再現しているが、我々はその物語の中間部に、恐らく彼自身に帰せられる次のような賛歌 (stotra) を見る。

> [Av-klp 73.16]
> sattvasmeraṃ sarasakaruṇākaumudīpūritāśaṃ
> śāntyai kāntaṃ sakalatamasāṃ śuklapakṣe niviṣṭam |
> nityānandaṃ paramam amṛtaṃ nirvikāraṃ sṛjantaṃ
> vande tāpapraśamasuhṛdaṃ buddhapūrṇendubimbam ||
>
> 諸々の善い性質ゆえに微笑を浮かべており (= 生来眩く輝き)、柔和な憐れみの心という月光で願望という空間を満たし、あらゆる無知 (= 闇) を除くために潔白な者の側に与し (= 白月に〔天に〕留まり)、魅力あり、絶えず歓びを与え、最高にして質を落とすことのない甘露を放ち、〔輪廻生存の〕苦 (= 熱苦) を鎮める友である、仏陀という満月の環に帰命いたします[3]。

Kṣemendra は上掲詩節 d 句に「仏陀という満月の環」(buddhapūrṇendubimba) という〈隠喩〉(rūpaka) を用い、その限定句に〈隠喩〉の比喩対象「仏陀」と比喩基準「満月の環」とに対応する二義を与える言葉の芸当を披歴する。二義の対応は次の通りである[4]。

	仏陀 (buddha°)	満月の環 (°pūrṇendubimbam)
sattvasmeraṃ	諸々の善い性質ゆえに微笑を浮かべている	諸々の善い性質ゆえに生来眩く輝く
°pūritāśaṃ	願望を満たす	空間を満たす
śāntyai sakalatamasāṃ śuklapakṣe niviṣṭaṃ	全ての無知を除くために潔白なる者の側に与する	全ての闇を除くために白月に〔天に〕留まる
tāpapraśamasuhṛdaṃ	〔輪廻生存〕苦を鎮める友	熱苦を鎮める友

さて Kṣemendra はいかなる意図からこの賛歌を挿入したのであろうか。自身の詩作能力を示すためであったのか。それとも詩人達の間にあった何らかの取り決めに従ったためか。確かに詩論家

*本論は特別研究員奨励費 (25·10048) による成果である。本論の執筆にあたり九州大学の岡野潔先生と片岡啓先生からケンブリッジ大学図書館所蔵の *Avadānakalpalatā* の写本、ネパールの National Archives 収録の *Avadānakalpalatā* と *Aśokāvadānamālā* の写本の複写を頂いた。広島大学の根本裕史先生からは *Kāvyādarśa* に対するチベット語註における *Avadānakalpalatā* の詩節引用に関する情報を頂いた。日本学術振興会特別研究員の川村悠人氏からは Pāṇini 文法学に関する筆者の疑問点について御教示頂いた。記し御礼申し上げる。

[2]山崎 [forthcoming] を参照せよ。

[3]テキストの異読・訳注については付論和訳研究 I を参照せよ。

[4]この技法は詩論家 Daṇḍin、Mammaṭa が言う〈掛詞による隠喩〉(śliṣṭarūpaka) にあたる。〈掛詞による隠喩〉ついては GEROW [1971: 255] を参照せよ。

Daṇḍin が *Kāvyādarśa* (『詩の鏡』) 第一章第 14–19 詩節で列挙する、詩人が大美文詩 (mahākāvya) で描くべき諸題材のうちに賛歌は数え入れられていない[5]。しかし賛歌が大美文詩を特徴づける一要素であったことを我々は Bhāravi (六世紀中頃)、Māgha (7–8 世紀)、Ratnākara (九世紀) といった Kālidāsa (4–5 世紀) より後の美文詩人達が自作品に賛歌を取り入れている事実から知る[6]。従って大美文詩に賛歌を挿入する慣例が美文詩人の間にあり Kṣemendra がこれに従っていたことは十分に考えられよう。では大美文詩の一要素としての賛歌に適用された〈荘厳法〉(alaṃkāra) をめぐってそれぞれの作品についてどのような特徴を見出すことができるか[7]。ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教詩人達による大美文詩及び賛歌に関する研究は様々な方面からなされているが、上記問題を論じた研究は管見の及ぶ限りなされていない。本論は Kālidāsa より後の最初期に属す詩人 Bhāravi の大美文詩 *Kirātārjunīya* (『森の民とアルジュナの戦闘』) を取り上げ上記問題の解明を試みるものである[8]。なお本考察では Ānandavardhana (九世紀) の *Devīśataka* (『女神百頌』)、Avatāra の *Īśvaraśataka* (『主宰神百頌』) は考慮外とする。なぜなら両者は citrabandha (種々の意匠に依存して剣や蓮華などの図案を表す構成) に特徴付けられる riddle poetry というジャンルに属す作品であり[9]、讃詠を目的としているとは考えられないからである。

2 *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節に見られる〈言葉の荘厳法〉

2.1 〈同音群反復〉

Kirātārjunīya は叙事詩 *Mahābhārata* に描かれる、パーンドゥの王子アルジュナとシヴァの化身である森の民との戦いを歌い上げた全 18 章からなる大美文詩であり、その材源は *Mahābhārata* 第三巻第 28–42 章に求められる[10]。最終章の第 22–43 詩節は、森の民がシヴァの化身であることを知った主人公アルジュナが彼に奉げる賛歌にあてられている。作者 Bhāravi はこの一連の箇所で材源とした *Mahābhārata* の叙述を忠実に再現する。しかし CAPPELLER [1912: xx] が指摘する通り問題箇所の詩節の語彙・語法に *Mahābhārata* のそれとの一致はなく、Bhāravi 自身が材源に詩的彫琢を加えた形跡を我々は見出すことができる。その一つが〈言葉の荘厳法〉(śabdālaṃkāra) である。Bhāravi は賛歌を構成する詩節のほぼ半数にあたる 11 詩節に〈同音群反復〉(yamaka) もしくはそれに類した〈疑似同音群反復〉(pseudo-yamaka) を適用している[11]。これら用例に認められる諸特徴は、同時代の賛歌を取り巻く文学史的背景について興味深い事実を我々に示唆する。以下にその用例を見よう。〈同音群反復〉の代表例として第一に挙げねばならないのは次の詩節である。

---

[5]詩節の訳については辻 [1973: 3]、DIMITROV [2002: 216–217] を参照せよ。

[6]LIENHARD [1984: 131] を参照せよ。

[7]以下〈荘厳法〉(figure of speech) という語を用いるが、これはインド古典詩論における śabdālaṃkāra と arthālaṃkāra の総称であることをお断りしておく。alaṃkāra に対する訳語としてはこの他に〈修辞法〉(rhetoric) が考えられるが、これは後者のみを指すものと誤解されかねないので本論では用いない。

[8]以下 *Kirātārjunīya* の底本には GOḌABOLE and PARABA eds., Bombay: NSP, 1885 を用いる。

[9]citra については GEROW [1971: 175–189] を参照せよ。

[10]対応する *Mahābhārata* の章数は Poona 本のそれである。*Kirātārjunīya* 全 18 章の内容については CAPPELLER [1912] が各章に対する独訳の冒頭に示す梗概を見よ。簡潔な要約は LIENHARD [1984: 185–187] にも与えられている。*Kirātārjunīya* 全 18 章の翻訳業績を我々は CAPPELLER [1912] に負うが、これに先立つ重要な翻訳業績として Friedrich RÜCKERT (1788–1866) による未刊行の独訳を挙げねばならない。彼の遺稿はベルリン州立図書館に移管されており、STRAUBE [2011] はその一部にあたる第八章第 27–57 詩節に対する RÜCKERT の遺稿を活字化して公開した。STRAUBE [2011] によれば同訳は RÜCKERT が Franz BOPP から借用した、1814 年刊行の Mallinātha 註付きの初版本に基づいたもので、248 枚からなり、彼が BOPP 宛に送った書翰の内容から推定して 1829 年末もしくは翌 30 年初めから 1833 年夏の間に翻訳されたものらしい。

[11]以下 yamaka の対訳語として〈同音群反復〉という語を用いるが、これは「意味の異なる音節のユニットを反復する śabdālaṃkāra の一種」を指すことをお断りしておく。GEROW [1971: 233–238] を参照せよ。

[Kir 18.42]
asaṃvidānasya mameśa **saṃvidāṃ** titikṣituṃ duścaritaṃ tvam arhasi |
virodhya mohāt punar abhyupeyuṣāṃ gatir bhavān eva durātmanām api ||

諸々の知識を自在に操る者よ、事を知らない私がなした不行状を爾はどうか許されよ。迷いを理由に戦いを交えておきながら、再び近づいて来た、心根の曲がった者達ですら、赴く所は貴方様を措いてないのである。

Bhāravi は vaṃśastha 調の詩節 a 句を構成する 12 音節を脚頭、中間部分、脚末で四音節毎に三分割し脚頭の三音節を脚末の三音節で反復する。その構造を表に示すならば次の通りである。

asaṃvidānasya	< asaṃvidāna <na vidyate saṃvidānaṃ yasya>	Gen. sg. m.
īśa saṃvidāṃ	< īśa/saṃvid	Voc. sg. m./Gen. pl. m.

Bhāravi の約三百年後に活動したカシミールの詩論家 Rudraṭa は *Kāvyālaṃkāra*（『詩の荘厳』）第三章を〈同音群反復〉の説明にあてる。彼は詩脚内に適用される〈同音群反復〉を定義するにあたり詩脚を (1) 半分、(2) 四分の一、(3) 三分の一、(4)(1)–(3) 以外に分け、それぞれについて脚頭、中間部、脚末の組み合わせを示す。*Kirātārjunīya* 第 18 章第 42 詩節における適用例は Rudraṭa の分類に従うと彼が第 54 詩節で示す〈アーディ・アンタ〉(ādyanta) と呼ばれる〈同音群反復〉にあたる[12]。

[*Kāvyālaṃkāra* 3.54]
ghanāgha nāyaṃ na nabhā **ghanāghanān udārayann** eti mano 'n**u dārayan** |
sakhe 'dayaṃ tām avilā**sa khedayann ahīyase** gor athavā n**a hīyase** ||

罪深い者よ、雨雲を拡散させた後で、心を引き裂くこの雨季は必ずやって来よう。生真面目な友よ、そ〔の恋人〕を冷淡に苦しめておいて、君は蛇のように振る舞う。或いはむしろ、雄牛を失わない[13]。

---

[12]テキストは DURGĀPRASĀDA and PARABA eds., Bombay: NSP, 1886 のそれに従う。

[13]Namisādhu on *Kāvyālaṃkāra* 3.54 (34.6–10): etat prāvṛṣi pathikasya suhṛdocyate — he *ghanāgha* gṛhānanusaraṇād bahupāpa, ayam asau *nabhāḥ* śrāvaṇo māso na naiti | api tv āyāty eva | nabhaḥśabdo māsavācakaḥ puṃliṅgaḥ | kīdṛśo nabhāḥ | *ghanāghanān* sajalajaladān *udārayan* vistārayan | *anu* paścāc ca *manaś* cittaṃ *dārayan* vipāṭayan | tathā he *sakhe avilāsa* nirlīla, *tāṃ* kāntām *adayaṃ* nirdayaṃ *khedayann* udvejayann *ahīyase* sarpāyase | *athavā gor* balīvardān *na hīyase* | balīvarda evāsīty arthaḥ |（「次のことを雨季に旅行く男に友人が言う。おぉ罪深い者よ、妻の後を追うことがないので大いに罪作りな者よ、この (ayam = asau) 雨季、つまりシュラーヴァナ月が来ないことはない。そうではなくて必ずやってくる。nabhas という言葉は月を表示しているので男性形をとる。【問】どのような雨季か。【答】厚い雨雲、つまり水を含んだ雲を拡散させる (udārayan = vistārayan)〔雨季〕。そして後で (anu = paścāt) 心を (manas = cittam) 引き裂く (dārayan = vipāṭayan)〔雲〕。そしてまた、おぉ友よ、生真面目な者よ (avilāsa = nirlīla)、その愛する女を冷淡に (adayam = nirdayam) 苦しめておいて (khedayan = udvejayan)、君は蛇のように振る舞う (ahīyase = sarpāyase)。或いはむしろ、雄牛を (goḥ = balīvardāt) 失わない。君は雄牛に他ならないという意味である。」）
d 句が意味する所が分かりにくい。しかし Rudraṭa はここで「雄牛」(go) を否定的な意味で用いているようである。これを支持する用例として Daṇḍin の *Kāvyādarśa* 第一章第 16 詩節が挙げられる (引用テキストは THAKUR and JHA eds., Darbhanga: The Mithila Institute, 1957 に従う)。

[*Kāvyādarśa* 1.6]
gaur gauḥ kāmadughā samyak prayuktā smaryate budhaiḥ |
duṣprayuktā punar gotvaṃ prayoktuḥ saiva śaṃsati ||

〔人が〕言葉を正しく使用しているなら、賢者たちは〔その言葉を〕望みのものをもたらす牝牛だと見なす。しかし正しく使用されていなければ、同じそれは、使用する者が雄牛であることを表す。

Ratnaśrījñāna は詩節が意味する所を次のように説明する。*Ratnaśrī* on *Kāvyādarśa* 1.6 (5.8–9): manuṣyatvāviśeṣe 'pi śāstrajño deva iva pūjyate guṇānurāgibhir itaras tu paśur iva dṛśyata iti ||（「人間であることに違いはなくても、論書を知る者は、美質に魅力を覚える者達から神の如く敬われる。しかしそうでない者は獣のように見られると〔言う〕。」）。この用例については川村悠人氏の御教示に負う。

a	**ghanāgha nā**yam **ghanāghanā**n	< ghanāgha <ghanam aghaṃ yasya>/na/idam < ghanāghana	Voc. sg. m./ind./Nom. sg. m. Acc. pl. m.
b	**udārayan** an**u dārayan**	< udārayat < anu/dārayat	Nom. sg. m. ind./Nom. sg. m.
c	**sakhe 'dayam** avilā**sa khedayan**	< sakhi/adaya <na vidyate dayā yasya yathā tathā> < avilāsa <na vidyate vilāso yasya>/khedayat	Voc. sg. m./Acc. sg. n. Voc. sg. m./Nom. sg. m.
d	**ahīyase** n**a hīyase**	< ahi < na/hā	2nd. sg. pres. Ā. ind./2nd. sg. pres. Pass.

vaṃśastha 調の各詩脚を四音節毎に三区分し脚頭の音節を脚末のそれで反復する点で *Kirātārjunīya* 第 18 章第 42 詩節の適用例と全く同じである。次に第 36 詩節を見よう。

[Kir 18.36]
rakṣobhiḥ suramanujair diteḥ sutair vā yal lokeṣv avikalam āptam[14] ādhipatyam |
pāvinyāḥ śaraṇagatārtihāriṇe tan māhātmyaṃ **bhava bhava**te namaskriyāyāḥ ||

悪魔達や神々、人間達、ディティの子達が諸々の世界で完璧な支配力を手に入れたのは、バヴァよ、庇護下にいる者達が患う苦しみを除く貴方様に対する、〔過失を〕除く頂礼がもたらした効力なのである。

この詩節では d 句の中間部にあたる第 4–5 音節が後続する第 6–7 音節で反復されている。〈同音群反復〉を構成する語の語形は次の通りである。

bhava	< bhava	Voc. sg. m.
bhavate	< bhavat	Dat. sg. m.

以上の詩節は各脚 13 音節よりなる praharṣiṇī調であるから、Bhāravi は音節数に基づいて詩脚を均等に四分割せず脚の中間部に〈同音群反復〉を適用している。この例を説明しうる用例を Rudraṭa の *Kāvyālaṃkāra* に求めると第 58 詩節がこれにあたる。

[*Kāvyālaṃkāra* 3.58]
kamalinī **sarasā sarasā**m iyaṃ vikasitā**navamaṃ navamaṇ**ḍanam |
kim iti nā**dhigatā dhig atā**dṛśaṃ madhukare**ṇa batāṇavatā** kṛtam ||

花を咲かせ魅力に溢れているので諸々の湖のうちの最も素晴らしい、真新しい飾りであるこの蓮池に羽音を立てる蜂は一体どうしてやって来ないのか。何とまあ嘆かわしく悲しいことか。〔蜂は〕似つかわしくないことをなしている[15]。

〈同音群反復〉が適用された語の文法構造を示すならば次の通りである。

[14]テキストはāpram であるが誤植と思われる。Mallinātha 註に従いāptam に訂正する。

[15]Namisādhu on *Kāvyālaṃkāra* 3.58 (35.8–11): *iyaṃ kamalinī* padminī *kim iti* kasmān *madhukareṇa* bhṛṅgena *nādhigatā* na samprāptā | *dhik* kaṣṭam | ten*āṇavatā* śabdavat*ātādṛśam* ayuktaṃ *kṛtam* | *dhigbata*śabdāv atra khedādhikyaṃ sūcayataḥ | kīdṛśī | *sarasā* nūtanā | *vikasitā* praphullā | ata eva *sarasāṃ* jalāśayānām *anavamaṃ* śreṣṭhaṃ *navamaṇḍanaṃ* pratyagrālaṃkaraṇam |（「この蓮池に (kamalinī = padminī) 一体どうして (kim iti = kasmāt) 蜂は (madhukareṇa = bhṛṅgena) やって来ないのか (nādhigatā = na saṃprāptā)。あぁ何と嘆かわしいことか (dhik = kaṣṭam)。羽音を立てる (aṇavatā = śabdavatā) それ (= 蜂) は似つかわしくないことを (atādṛśam = ayuktam) なしている。ここで dhik と bata という二つの言葉は過度の苦痛を示唆している。【問】どんな〔蓮池〕か。【答】魅力に溢れていて (sarasā = nūtanā) 花を咲かせている (vikasitā = praphullā)〔蓮池〕。まさしくこの理由で、諸々の湖のうちで (sarasām = jalāśayānām) 最も素晴らしい (anavamam = śreṣṭham)、真新しい飾り (navamaṇḍanam = pratyagrālaṃkaraṇam) である〔蓮池〕。」）

a	**sarasā** **sarasā**m	< sarasa <saha rasena vartata iti> < saras	Nom. sg. f. Gen. pl. n.
b	a**navamaṃ** **navamaṇḍ**anam	< anavama <nāvamam> < navamaṇḍana <navaṃ ca tat maṇḍanaṃ ca>	Nom. sg. n. Nom. sg. n.
c	a**dhigatā** **dhig atā**dṛśam	< adhigata < dhik/atādṛśa	ind./Nom. sg. f. ind./Nom. sg. n.
d	madhukare**ṇa bata** a**ṇavatā**	< madhukara/bata < aṇavat <aṇa + matUP>	Inst. sg. m./ind. Inst. sg. m.

問題の詩節は各脚 12 音節からなる drutavilambita 調であるから、本来詩脚を三音節ずつ四つに分けその中間部にあたる第 4–9 音節に〈同音群反復〉を適用せねばならない。しかし以上の用例では詩脚がそれぞれ四、三、三、二音節ずつ四つに分けられその第 5–10 音節に〈同音群反復〉が適用されている。

以上の用例にのみ注目すれば、Bhāravi が活動した時代には後の Rudraṭa の詩論書に規定される〈同音群反復〉を射程内に入れた洗練された詩作がなされていたと我々は推定できよう。しかし賛歌をなす一連の詩節に用いられる〈同音群反復〉のうち Rudraṭa の分類に基づいて説明できるのは以上の二例のみであり、残る用例はこれを逸脱する。第 22 詩節を見よう。

[Kir 18.22]
śaraṇaṃ bhavantam atikāruṇikaṃ bhava bhakti**gamya**m adhi**gamya** janāḥ |
jitamṛtyavo **'jita** bhavanti bhaye sa**surāsura**sya jagataḥ śaraṇam ||

打ち負かされない者、バヴァよ、とても憐み深く、信愛を通じて近づくことのできる貴方様という守護者を得て、人々は死神ヤマに打ち勝って、神々と悪魔のいる世界の恐怖に対して身を守る者となる[16]。

b	bhakti**gamya**m adhi**gamya**	< bhaktigamya <bhaktyāgamyam> < adhi-gam + LyaP	Acc. sg. m. ind.
c	**jita**mṛtyavo **'jita**	< jitamṛtyu <jito mṛtyur yebhiḥ> < ajita <na jitaḥ>	Nom. pl. m. Voc. sg. m.
d	sa**surāsura**sya	< sasurāsura <saha surāsurebhir vartate>	Gen. sg. m.

bcd 句に三箇所の〈同音群反復〉が認められる。しかし d 句は厳密な意味での〈同音群反復〉ではない。また脚中で反復される音節の間に前接辞 (upasarga) や語が介在している上に、音節が反復される位置に規則性が認められない。

2.2 〈疑似同音群反復〉

2.2.1 音の一部が反復されないもの

以上に見て来た三例は厳密さに程度の差はあれ「複数の意味を持つ語からなる同じ音節群が反復される」という点で、詩論家による〈同音群反復〉の規定に従っている。しかし残る八例は何らかの形でそれを逸脱する〈疑似同音群反復〉に分類される。それらに認められる傾向と特徴を分析すべく、まず第 30、38–40 詩節を見よう。

---

[16]Mallinātha 註に従い ab 句のśaraṇa を行為主体 (kartṛ) の意味に解す。*Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.22 (265.29–31): *bhaktigamyaṃ* bhaktimātrasulabhaṃ *bhavantaṃ śaraṇaṃ rakṣakam adhigamya jitamṛtyavo* vigatamaraṇāḥ | amarā bhūtvety arthaḥ | *janāḥ sasurāsurasya jagato bhaya* āpadi śaraṇaṃ svayaṃ rakṣitāro bhavanti | *śaraṇaṃ* gṛharakṣitroḥ iti viśvaḥ |（「信愛を通じて近づくことのできる、つまりひたすら信愛を捧げることだけで容易に得ることができる貴方様という守護者 (śaraṇam = rakṣakam) を得て、死神ヤマに打ち勝った (jitamṛtyavaḥ = vigatamaraṇāḥ)—神々となってという意味である—人々は神々と悪魔のいる世界の恐怖、つまり災いに対して、自ら身を守る者となる (śaraṇam = rakṣitāraḥ)。『śaraṇa は家と守護者を意味する』と *Viśvakośa* は言う。」）

[Kir 18.30]
saṃnibaddham apahartum ahāryaṃ bhūri durgatibhayaṃ bhuvanānām |
adbhutākṛtim imām ati**māyas** tvaṃ bibharṣi karuṇāmaya **māyām** ||

憐み深い御方よ、誤った心象を抱くことを超越している爾は、〔自分がなした業と〕結び付けられているので〔他者が〕除くことのできない、生きとし生ける者達が味わう地獄の大きな恐怖を取り除くために、驚くべき姿をしたこの幻像をとる[17]。

[Kir 18.38–40]
bhavataḥ smaratāṃ sadāsane jayini brahmamaye niṣeduṣām |
dahate bhavabījasaṃtatiṃ **śikhine** 'nekaś**ikhāya** te namaḥ ||
ābādhāmaraṇabhayārciṣā cirāya pluṣṭebhyo **bhava** mahatā **bhavā**nalena |
nirvāṇaṃ samupagamena yacchate te bījānāṃ prabhava namo 'stu jīvanāya ||
yaḥ sarveṣām **āvarītā varī**yān sarvair bhāvair nāvṛto 'nādiniṣṭhaḥ |
mārgātītāyendriyāṇāṃ namas te 'vijñeyāya vyomarūpāya tasmai ||

[38] 勝利をもたらし、ブラフマンよりなる正しい座に腰を下ろし、貴方様のことを想起する者達の輪廻生存の一群の原因を焼き尽くす、無数の炎を上げる火である爾に頂礼あれ[18]。

[39] バヴァよ、諸々の種子の源よ、苦しみと死に対する恐れという炎を上げる、生存という大きな火で長い間焼かれた者達に、〔彼等が〕近づいて行くことで安らぎを与え、活力を与える爾に頂礼あれ[19]。

---

[17] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.30 (267.29–34): atikrānto māyāṃ bandharūpām *atimāyaḥ* | atyādayaḥ krāntādyarthe dvitīyayā iti samāsaḥ | he *karuṇāmaya* he kṛpālo, *saṃnibaddhaṃ* svakarmaṇā dṛḍhabaddham ata ev*āhāryam* anyair anucchedyaṃ *bhūri* prabhūtaṃ *bhuvanānāṃ durgatibhayaṃ* narakabhayam | syān nārakas tu narako nirayo durgatiḥ striyām ity amaraḥ | *apahartum adbhutākṛtiṃ* vicitrarūpām *imāṃ māyāṃ* dṛśyamānāṃ līlāvigraharūpāṃ *bibharṣi* | anyeṣāṃ karmānubandhī vigrahaparigrahaḥ | bhavatas tu paropakārārtha ity arthaḥ ||（「束縛を本質とする、誤った心象を抱くことを超越している〔爾〕。*Vārttika* 10 on Pāṇini 2.2.18: atyādayaḥ krāntādyarthe dvitīyayā に基づいて〔対格限定〕複合語を形成している。おぉ憐み深い御方よ (he karuṇāmaya = he kṛpālo)、結び付けられている、つまり自分がなした業とかたく結び付けられている、まさにこの理由で、除くことができない、つまり他の者達が断ち切ることができない、大きな (bhūri = prabhūtam)、生きとし生ける者達が味わう地獄の恐怖を (durgatibhayam = narakabhayam)—『一方 nāraka、naraka、niraya、女性形の durgati は〔地獄を意味する〕同意語である』と *Amarakośa* は言う—除くために、驚くべき姿をした (adbhutākṛtim = vicitrarūpām)、視覚認識される、色っぽさに特徴付けられた身体をその本質とするこの幻像をとる。他の者達は業と結び付いて身体を得るが、貴方様は他者を扶助するために〔身体を得る〕という意味である。」）

[18] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.38 (270.4–8): *jayini* jayaśīle sarvotkṛṣṭe | *brahmamaye* brahmapradhāne | tatprāptyupāyatvāt | *sadāsane* samyagāsane yogāsana ity arthaḥ | *niṣeduṣām* upaviṣṭānām | *bhavataḥ smaratāṃ* bhavantaṃ dhyāyatām | 'adhīgartha' ityādinā śeṣe karmaṇi ṣaṣṭhī | *bhavabījasaṃtatiṃ* saṃsāranidānasamūhaṃ bhavanidānakarmasaṃghātaṃ *dahate* bhasmīkurvate *'nekaśikhāya* bahujvālāya *śikhine* vahnimūrtaye *te* tubhyaṃ *namaḥ* ||（「勝つことを習いとする (jayini = jayaśīle)、つまりどんな者よりも優れている、ブラフマンよりなる、つまりブラフマンを主とする〔爾〕。それ (= ブラフマン) に到達する手段であるから。正しい座 (sadāsane = samyagāsane) にとはヨーガを行う座に〔座して〕という意味である。座して (niṣeduṣām = upaviṣṭānām) 貴方様のことを想起する、つまり貴方様に心を傾ける者達。Pāṇini 2.3.52: adhīgarthadayeśāṅ karmaṇi に基づいて行為の対象が残余として意図される場合に第六格接辞が起こる。輪廻を繰り返す一群の原因 (bhavabījasaṃtatim = saṃsāranidānasamūham)、つまり輪廻生存の原因である一群の行為を燃やす、つまり灰にする、沢山の炎を上げる (anekaśikhāya = bahujvālāya) 火、つまり火という形をとった爾に (te = tubhyam) 頂礼あれ。」）

[19] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.39 (270.14–18): he *bhava bījānāṃ prabhava* kāraṇabhūta | jīvānām iti pāṭhe teṣāṃ tvatpratibimbatvād iti bhāvaḥ | *ābādhā*dhyātmikādiduḥkhaṃ *maraṇaṃ* pañcatvaṃ tābhyāṃ *bhayaṃ* tad ev*ārcir* yasya tena *mahatā bhavānalena* saṃsārāgninā *cirāya* ciraṃ *pluṣṭebhyo* dagdhebhyaḥ *samupagamena* saṃsevayā *nirvāṇaṃ* saṃtāpaśāntiṃ *yacchate* dadate jīvayatīti *jīvanaṃ* tasmai *jīvanāya* jalātmane *te* tubhyaṃ *namaḥ* ||（「おぉバヴァよ、諸々の種子の源、つまり原因である者よ、諸々の命の (jīvāṇām) という異読の場合、それら (= 命) は爾の影像であるからということが意図されている。苦痛、つまり自我意識によって引き起こされる〔苦〕を始めとする苦と死 (maraṇam = pañcatvam) への恐れという炎を上げる、大きな、生存という火 (bhavānalena = saṃsārāgninā) で長い間 (cirāya = ciram) 焼かれた者達に (pluṣṭebhyaḥ = dagdhebhyaḥ)、〔彼等が〕近づいていくこと、つまり仕えることで安らぎ、つまり熱の鎮静をもたらす (yacchate = dadate)、活力を与える者 (jīvayatīti jīvanam)、つまり水を本質とする者である爾に (te = tubhyam) 頂礼あれ。」）

[40]　爾はとても大きく、あらゆる事物を覆いつくす者であり、あらゆる言葉の意味を用いても表現され得ず、始めもなければ終わりもない。諸感官が働く領域を超えているので認識され得ない、虚空の形をとった爾に頂礼あれ[20]。

[Kir 18.43]
āstikyaśuddham avataḥ priya**dharma dharmaṃ dharmā**tmajasya vihitāgasi śatruvarge |
samprāpnuyāṃ vijayam īśa yayā samṛddhyā tāṃ bhūtanātha vibhutāṃ vitarāhaveṣu ||

善き行いを愛す御方よ、信心ゆえに汚れを離れたヴェーダに従う行いを守るダルマの息子 (= ユディシュティラ) を害した敵の大群に対して、主よ、その〔武器の〕威力を借りて私が勝利を収めることができる所の、その力に他ならない〔武器に関する〕知識を諸々の戦場で授けられよ。生ける者達の主人よ[21]。

---

[20] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.40 (270.23–29): *varīyān* urutaraḥ | vibhur ity arthaḥ | priyasthira ityādinoruśabdasya varādeśaḥ | yas tvaṃ *sarveṣāṃ* vastūnām *āvaritā*cchādayitā | vṛṇotes tṛcpratyayaḥ *sarvair bhāvaiḥ* padārthair *nāvṛtaḥ* kenāpi kadācid apy anāvṛtaḥ svayaṃ vyāpakatvād iti bhāvaḥ | avidyamāne ādiniṣṭhe utpattināśau yasyāsāv *anādiniṣṭho* nityaḥ | niṣṭhāniṣpattināśāntāḥ ity amaraḥ | *indriyāṇāṃ* cakṣurādīnāṃ *mārgātītāyā*tīndriyāya | ata ev *āvijñeyāyā*paricchedyāya *tasmai vyomarūpāya te* tubhyaṃ *namaḥ* || (「とても大きな者 (varīyān = urutaraḥ)。支配者という意味である。Pāṇini 6.4.157: priyasthirasphirorubahulaguruvṛddhatṛpradīrghavṛndārakāṇām prasthasphavarbaṃhigarvarṣitrabdrāghivṛndāḥに基づいて uru という言葉に vara が代置されている。あらゆる事物を覆いつくす者である (āvaritā = ācchādayitā) 爾。〔Pāṇini 3.1.133: ṇvultṛcau と 3.3.169: arhe kṛtyatṛcaś ca に基づいて〕動詞語根 vṛ の後に kṛt 接辞 tṛC が導入されている。あらゆる言葉の意味を用いて (bhāvaiḥ = padārthaiḥ) 表現されえない、つまりどんな者によっても、どんな時にも表現されえない〔爾〕。自ら遍充する側であるからということが意図されている。始まりも終わりもない、つまり誕生も死滅もない者、つまり常住なる者である〔爾〕。『niṣṭhā と niṣpatti、nāśa、anta は同義語である』と *Amarakośa* は言う。諸感官、つまり目を始めとするものの領域を超えている。つまり感官を越えている〔爾に〕。まさにこの理由で認識されえない、つまり識別されえない、虚空の形をとった爾に (te = tubhyam) 頂礼あれ。」)

[21] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.43 (271.22–28) he *priyo dharmo* yasyeti *priyadharma* | samāsānto vidhir anityaḥ iti na samāsānto 'nicpratyayaḥ | paraloke matir astīty āstikaḥ pāralaukikaḥ | astināstidiṣṭam iti ṭhak | tasya bhāva *āstikyaṃ* viśvāsas tena *śuddhaṃ* vimalaṃ *dharmaṃ* vaidikācāram *avataḥ* pālayato *dharmātmajasya* yudhiṣṭhirasya *vihitāgasi* kṛtāparādhe *śatruvarge* viṣaye he *īśa* yayā *samṛddhyā*stravaibhavena *vijayaṃ samprāpnuyāṃ* bhajeyam | he *bhūtanātha āhaveṣu tāṃ vibhutāṃ* vibhūtim astravidyāṃ *vitara* dehi || (「おぉ正義を愛する者よ—*Paribhāṣenduśekhara* 84: samāsānto vidhir anityaḥに基づいて複合語最終要素となる taddhita 接辞 aniC が導入されていない—来世を信じる者 (āstikaḥ = pāralaukikaḥ)、Pāṇini 4.4.60: astināstidiṣṭam に基づいて taddhita 接辞 ṭhaK が導入されている。それの性質が来世を信じる者の性質、つまり信心であり、それゆえに清浄な (śuddham = vimalam)、ダルマ、つまりヴェーダに従う行いを守る (avataḥ = pālayataḥ) ダルマの息子、つまりユディシュティラを害した (vihitāgasi = kṛtāparādhe) 敵の大群に対して、おぉ主よ、その威力、つまり武器の力を借りて勝利を私が収めうる (samprāpnuyām = bhajeyam) 所の、その力 (vibhutām = vibhūtim)、つまり武器に関する知識を、おぉ生ける者達の主人よ、諸々の戦場で授けられよ (vitara = dehi)。」)

Mallināthaは a 句末の dharmam に vaidikācāram「ヴェーダに従う行い」という語釈を与える。しかしその前後の priyadharma と dharmātmaja のそれぞれ後分、前分要素をなす dharma を別の語で言い換えない。CAPPELLER [1912: 151] は問題の箇所に次の訳をあてる。„ ... es mir gelingen möge, o Herr, du Freund der Gerechtigkeit, den Sieg zu gewinnen über die Schaar der Feinde welche gefrevelt hat an dem Sohne der Gerechtigkeit, der das durch den rechten Glauben geläuterte Gesetz schirmt.“ (underline mine). つまり priyadharma と dharmātmaja をそれぞれ「正義の友」、「正義の息子」と解釈する。しかし後者の dharma については名称語である「ダルマ神」が意図されているはずである (*Mahābhārata* 所収のユディシュティラの出生に関する伝説については MANI [1975: 226] を参照せよ)。従ってこれを反映させた解釈を考えるべきであろう。問題は前者の dharma の意味である。Bhāravi がこれをどのような意味で用いているか確定し難い。しかし彼が〈同音群反復〉を試みていることを考慮すれば、同一音節で複数義を表示する原則を踏まえた解釈を考えるべきであろう。priyadharma という語の用例は Aśvaghoṣa の *Buddhacarita* 第五章第 32 詩節、Āryaśūra の *Jātakamālā* 第 20 章第四詩節などに見出される。しかし両作品ともに我々が参照できる古典註を欠き意味を確定できない。そこで kośa 類を検討してみる。Amarasiṃha は dharma を *Amarakośa* 1.4.24cd と 1.6.3ab でそれぞれ puṇya「徳ある行い」と vedavidhi「ヴェーダ聖典に基づいて実行されるもの」の同意語としている (*Amarakośa* 1.4.24cd: syād dharmam astriyāṃ puṇyaśreyasī sukṛtaṃ vṛṣaḥ「dharma、女性形以外の puṇya と śreyas、sukṛta、vṛṣa は『徳ある行い』を意味する同意語とされるべきである。」、*Amarakośa* 1.6.3ab: śrutiḥ strī veda āmnāyas trayī dharmas tu tadvidhiḥ「女性形の śruti、veda、三種の āmnāya は『ヴェーダ聖典』を意味する同意語である。一方 dharma とはそれ (= ヴェーダ聖典) に基づいて実行されるもののことである」、テキストは RAMANATHAN ed., Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1971 に基づく)。この説明を踏まえると dharma には「ヴェーダ聖典に基づく善い行い」という限定的な意味と「善い行い一般」という広い意味の二つを想定できよう。これを

第 30 詩節 cd 句末、第 38 詩節 c 句、第 39 詩節 b 句、第 40 詩節 a 句、第 43 詩節 ab 句に Bhāravi が同一音節を反復しようとした形跡がある。各詩節で反復される音節を構成する語を語形分析するならば次の通りである。

第 30 詩節	ati**māyas**	< atimāya <atikrānto māyām>	Nom. sg. m.
	māyām	< māyā	Acc. sg. f.
第 38 詩節	**śikhi**ne	< śikhin	Dat. sg. m.
	aneka**śikhā**ya	< anekaśikha <anekāḥ śikhā yasya>	Dat. sg. m.
第 39 詩節	**bhava**	< bhava	Voc. sg. m.
	bhavānalena	< bhavānala <bhavaś cāsāv analaś ca>	Inst. sg. m.
第 40 詩節	**āvarītā**	< āvarītṛ < ā-vṛ + tṛC	Nom. sg. m.
	varīyān	< varīyas < uru + īyasUN	Nom. sg. m.
第 43 詩節	priya**dharma**	< priyadharma <priyo dharmo yasya>	Voc. sg. m.
	dharmaṃ	< dharma	Acc. sg. m.
	dharmātmajasya	< dharmātmaja <dharmasyātmajaḥ>	Gen. sg. m.

以上の例では互いに意味を異にする「誤った心象を抱くことを超越している者」(atimāya) と「幻影」(māyā)、「火」(śikhin) と「炎」(śikhā)、「バヴァ」(bhava) と「輪廻生存」(bhava)、「覆いつくす者」(āvarītṛ) と「とても大きい者」(varīyas)、「善い行い」(dharma) と「ヴェーダに従う行い」(dharma)、「ダルマ神」(dharma) という語を用いた音の反復が意図されている。しかしいずれも本来反復されるべき音が反復されない箇所があり〈同音群反復〉として不完全な形をとる。

2.2.2 同一同義語が同じ語形で反復されるもの

この他に我々の関心を惹くのは同一同義語が同じ語形で反復される〈疑似同音群反復〉が適用されている事例である。第 41 詩節がそれにあたる。

[Kir 18.41]
aṇīyase viśvavidhāriṇe **namo namo** 'ntikasthāya **namo** davīyase |
atītya vācāṃ manasāṃ ca gocaraṃ sthitāya te tatpataye **namo namaḥ** ||

とても微細なのに、あらゆるものを保持する爾に頂礼あれ。近くにいるのに、〔とらえ難いので〕とても遠くにいる爾に頂礼あれ。言葉と心の領域を超え続けているのに、言葉と心を監視する爾に頂礼あれ[22]。

ここでは主格・単数形で namas という語が「頂礼」という意味を表示して五回反復されている。註釈家 Mallinātha はこの反復表現 (dvirukti) が動揺 (sambhrama) を意図して用いられていることを説明する[23]。しかし音の反復については何ら言及しない。

適用し三箇所の dharma をそれぞれ「善い行い」、「ヴェーダに従う行い」、「ダルマ神」という意味に解す。

[22] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.41 (271.1–5): he bhava, *aṇīyase* sūkṣmatarāya tathāpi *viśvavidhāriṇe* jagaddhārakāya *te* tubhyaṃ namaḥ | *antikasthāyā*ntaryāmitayā saṃnikṛṣṭāya sate | tathāpi *davīyase* durgrahatvād dūratarāya *te* tubhyaṃ *namaḥ* | *vācāṃ manasāṃ ca gocaraṃ* viṣayam *atītya sthitāyā*vāṅmanasagocarāya | *tatpataye* teṣāṃ vāṅmanasām adhyakṣāya | tadadhyakṣas tair eva na dṛśyata iti virodhaḥ | *te* tubhyaṃ *namo namaḥ* |(「おぉバヴァよ、とても微細な (aṇīyase = sūkṣmatarāya) のにもかかわらず、あらゆるものを保持する、つまりその身体が世界を保持する爾に (te = tubhyam) 頂礼あれ。近くにいるのに、つまり内に存在するので近くにあるのに、それにもかかわらずとても離れている、つまりとらえ難いがゆえにとても遠くにいる爾に (te = tubhyam) 頂礼あれ。言葉と心の領域、つまり対象を (gocaram = viṣayam) 超え続けているのに、つまり言葉と心の対象ではないのに、それらを見守る、つまりそれら言葉や心を見張る者である—それら (= 言葉や心) を監視する者を全く同じもの (= 言葉や心) を用いて見ることはできないという〈矛盾〉(virodha) である—爾 (te = tubhyam) に頂礼あれ。」)。〈矛盾〉については GEROW [1971: 265–268] を参照せよ。

[23] Ghaṇṭāpatha on Kir 18.41 (271.7): bhaktyudrekāc ca sambhramaḥ (「そして信愛に満ち満ちているがゆえに、動揺が起こっている。」)。*Vārttika* 5 on Pāṇini 8.1.12: cāpale に対する議論については *Mahābhāṣya* 369.21:

2.2.3　〈同音群反復〉と融合したもの

Kirātārjunīya 第 18 章第 22–43 詩節に見られる音節の反復の形として、以上の他に〈同音群反復〉と〈疑似同音群反復〉が同一詩節に適用される例を挙げることができる。

[Kir 18.23]
vipad eti tāvad avasādakarī na ca **kāma**sampad abhi**kāma**yate |
na namanti caika**puruṣaṃ puruṣās** tava yāvad īśa na natiḥ kriyate ||

主よ、人が爾に敬礼しない限り、破滅をもたらす災いが〔その者のもとを〕訪れるけれども、望みのものの充足は〔その人を〕拒絶する。そして独り孤立したその人は、〔他の〕人達から敬意を受けることがない[24]。

[Kir 18.35]
tvam antakaḥ sthāvarajaṅgamānāṃ **tvayā** jagat prāṇiti deva viśvam |
tvaṃ yogināṃ hetuphale ruṇatsi **tvaṃ kāraṇaṃ kāraṇakāraṇānām** ||

爾は動不動の者達に終焉をもたらす者である。神よ、爾のおかげで全ての世界は命を保つ。爾はヨーガ行者達の〔個我を束縛する〕原因と彼等が受ける報いとを退ける。爾は諸元素の諸元素 (= 諸原子) を生み出す源である[25]。

第 23 詩節 b 句では kāma「望みのもの」と動詞語根 abhi-kam「好む」による〈同音群反復〉が成立している。しかし c 句末では puruṣa が「人」という同一義を表示し、しかも不完全な形で反復されている。第 35 詩節 d 句末では kāraṇa が「根源」、「元素」という意味を表示して反復されているが、形としては不完全である。acd 脚の冒頭では tvaṃが同じ語形で反復されるが、全て「爾」という意味を表示している。同義同一語が反復される箇所を除いた、同音が反復される箇所の語の構成は次の通りである。

第 23 詩節	**kāma**sampad	< kāmasampad <kāmasya sampad>	Nom. sg. f.
	abhi**kāma**yate	< abhi-kam	3rd. sg. pres. A.
第 35 詩節	**kāraṇaṃ**	< kāraṇa	Nom. sg. n.
	kāraṇakāraṇānām	< kāraṇakāraṇa <kāraṇānāṃ kāraṇāni>	Gen. pl. n.

cāpale dve bhavata iti vaktavyam 及び *Kāśikā* 885.22: sambhrameṇa pravṛttiś cāpalam 以下を参照せよ。また問題の反復表現は付加性 (ādhikya) を表示しているとも解釈可能である。付加性を意味する反復表現については川村 [2011] を見よ。

[24]*Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.23 (266.1–5): he *īśa, yāvat tava natiḥ* praṇāmo *na kriyate* | puruṣeṇeti śeṣaḥ *tāvad* ev*aikaṃ puruṣam* ekākinaṃ santam *avasādakarī* kṣayakarī *vipad eti* prāpnoti | *kāmasampan* manorathasampac ca *nābhikāmayate* necchati | *puruṣāś* cānye lokās tam *ekaṃ puruṣaṃ* tava stutim akurvāṇaṃ *na namanti* na vaśe vartante | nāniṣṭanivṛttir nāpīṣṭaprāptir ity arthaḥ | yadā tu tvāṃ praṇamanti tadaiva sarvaṃ labhyata iti bhāvaḥ || (「おぉ主よ、爾に頂礼 (natiḥ = praṇāmaḥ) しない限り—『人々が』と補われる—まさしくその限り、ただ一人の者のもとを (ekaṃ puruṣam = ekākinaṃ santam)、破滅をもたらす (avasādakārī = kṣayakārī) 災いが訪れよう (eti = prāpnoti)。しかし望みのものの充足 (kāmasampad = manorathasampad) は〔その者を〕拒絶する (nābhikāmayate = necchati)。そして人々、つまり他の人々は、独り孤立した、爾を讃えないその人に敬意を示さない、つまり影響を受けることはない。望まないことが起こらなくなることもなければ、望みのものが手に入ることもないという意味である。しかしもし爾に頂礼するならば、まさしくその場合にはありとあらゆるものが獲得されるということが意図されている。」)

[25]*Ghaṇṭāpatha* on Kir 18.35 (269.6–10): he *deva, tvaṃ sthāvarajaṅgamānām antakaḥ* saṃhartā | *tvayā* hetunā *viśvaṃ* sarvaṃ *jagat prāṇiti* jīvati | *tvaṃ yogināṃ hetuḥ* pravartakaṃ karma *phalaṃ* bhogaś ca te *hetuphale ruṇatsi* nivartayasi | teṣāṃ tvam eva bandhavimocaka ity arthaḥ | kiṃ ca | *tvaṃ kāraṇāni* bhūtāni teṣāṃ *kāraṇāni* bhūta-sūkṣamāṇi paramāṇavo vā teṣāṃ *kāraṇakāraṇānāṃ kāraṇaṃ* prakṛtyādidvārotpattisthānam | (「おぉ神よ、爾は動不動の者達に終焉をもたらす者 (antakaḥ = saṃhartā) である。爾のおかげで全ての (viśvam = sarvam) 世界は命を保つ (prāṇiti = jīvati)。爾はヨーガ行者達の〔個我を束縛する〕原因、つまり〔個我の束縛を〕起こさせる行いと〔その〕報い (phalam = bhogaḥ) とを退ける (ruṇatsi = nivartayasi)。爾こそが彼等の束縛を解く者だという意味である。さらにまた爾は諸元素 (kāraṇāni = bhūtāni) の元素、つまり微細要素もしくは原子を生み出す源、つまり根本原質を始めとするものを介して〔微細要素もしくは原子が〕起こる場所である。」)

さて以上の *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節の用例に認められる、後代の詩論家による〈同音群反復〉の規定からの逸脱例は *Kirātārjunīya* 全体を通して問題の賛歌に限定的なものと見なすことができるか。この問題を検討するにあたっては *Kirātārjunīya* 第 15 章における〈同音群反復〉の用例が参考になる。同章は 53 詩節からなり大美文詩の主題の一つである戦争の描写にあてられている。Bhāravi は同章で八詩節に〈同音群反復〉を適用する[26]。我々はその用例にも詩論家による〈同音群反復〉の規定からの逸脱例を見ることができる。次の例を見よう。

[Kir 15.35]
tad gaṇā dadṛśur bhīmaṃ **citrasaṃsthā ivācalāḥ** |
vismayena tayor yuddhaṃ **citrasaṃsthā ivācalāḥ** ||

驚くべき姿をした山々のようなガナ達はその二人 (= シヴァとアルジュナ) の、かの恐ろしい戦闘を、驚きのせいで絵の中にいる者達のように微動だにせず見ていた[27]。

偶数脚に〈同音群反復〉が適用されており、両脚の citra に「驚くべき」と「絵」、saṃsthā に「姿」と「とどまる行為」、acala に「山」と「動かない者」という二義を Bhāravi は与える。しかし iva は両脚で「如く」という同じ意味を表示しており、「複数の意味を表示する語からなる」という〈同音群反復〉の原則を逸脱する。次に第 52 詩節を見よう[28]。

[Kir 15.52]
vikāśam $^{(a)}$*īyur* $^{(b)}$*jagatīśa-*$^{(c)}$*mārgaṇā* vikāśam $^{(a)}$*īyur* jagatīśa-$^{(c)}$*mārgaṇāḥ* |
vikāśam $^{(a)}$*īyur* $^{(b)}$*jagatīśamārgaṇā* vikāśam $^{(a)}$*īyur* jagatīśamārgaṇāḥ ||

大地の主 (= アルジュナ) の諸々の矢は広がって行った。主 (= シヴァ) の諸々の矢は世界で望まれない所へと赴いた。大地を痩せ細らせる者 (= ダヌの子孫) 達を殺すガナ達は歓喜を覚えた。〔三つの〕世界の主 (= シヴァ)〔を目にするの〕を欲す者達は鳥達が飛び交う場所 (= 虚空) へ赴いた[29]。

---

[26] *Kirātārjunīya* 第 15 章に適用された〈荘厳法〉を概観するには LIENHARD [1984: 186–187] が便利である。ただし彼の〈荘厳法〉の分類と定義については慎重な読みを要す。

[27] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 15.35 (227.20–22): *bhīmaṃ tayor* harapāṇḍavayos *tat* prasiddhaṃ *yuddhaṃ gaṇāḥ* pramathāś *citrasaṃsthāś* citrākārā *acalāḥ* śailā *iva* | tathā citra ālekhye saṃsthā sthitir yeṣāṃ te *citrasaṃsthāś* citralikhitā *ivācalā* āścaryavaśān niścalāḥ santo *vismayena dadṛśuḥ* ||(「恐ろしい、その二人、つまりシヴァとパーンドゥの子孫との、かの周知の戦闘を、ガナ達、つまりプラマタ達は〔見た〕。驚くべき姿をした (citrasaṃsthāḥ = citrākārāḥ) 山々 (acalāḥ = śailāḥ) のような〔ガナ達〕。そしてまた絵 (citre = ālekhe) にとどまっている (saṃsthā = sthitiḥ) 者達、つまり絵に描かれた者達のように、驚きのせいで (āścaryavaśāt = vismayena) 動かず (acalāḥ = niścalāḥ)〔ガナ達は〕見ていた。」)

[28] LIENHARD [1984 :187] はこの詩節を mahāyamaka もしくは samudgaka の適用例と見なす。これは補足説明を要す。なぜなら mahāyamaka の定義を詩論家 Daṇḍin と Rudraṭa は異にするからである。前者が言う mahāyamaka とは「四つの脚全てが同一音節から構成され互いに異なる意味を表示する〈同音群反復〉」を指す (GEROW [1971: 233])。後者が言うそれは前者が śślokābhyāsayamaka に分類するもので「二つの詩節が同一音節から構成され互いに異なる意味を表示する〈同音群反復〉」を指す (GEROW [1971: 236])。LIENHARD [1984] が意図するのは前者であるから GEROW [1971] に言及すべきである。

[29] *Ghaṇṭāpatha* on Kir 15.52 (231.14–22): *jagatīśasya* pṛthivīpater arjunasya *mārgaṇā* bāṇā *vikāśaṃ* vistāram *īyuḥ* | tayā (Read *tathā*) *jagati* loka *īśamārgaṇāḥ* śambhuśarā *vikāśaṃ* viṣamagatim *īyuḥ* | bhaṅgam īyur ity arthaḥ | tathā *jagatīṃ* pṛthvīṃ *śyanti* tanūkurvantīti *jagatīśā* dānavāḥ āto 'nupasarge kaḥ tān mārayantīti *jagatīśamāraḥ* | mriyater ṇyantāt kvip | te ca te *gaṇāḥ* pramathāś ca *jagatīśamārgaṇā vikāśam* ullāsam īyuḥ | harṣaṃ prāpur ity arthaḥ | aho deve 'py asya parākramaprasara iti vismayād iti bhāvaḥ | tadānīṃ mārgayantīti *mārganā* anveṣakāḥ | kartari lyuṭ | *jagatīśasya* trailokyanāthasya *mārganā* anveṣakāḥ śivadraṣṭāro devarṣyādayo *vīnāṃ* pakṣiṇāṃ *kāśo* gatir atreti *vikāśam* ākāśam *īyuḥ* |(「大地の主 (jagatīśasya = pṛthivīpateḥ)、つまりアルジュナの矢 (mārgaṇāḥ = bāṇāḥ) は広がって (vikāśam = vistāram) 行った。そしてまた世界で (jagati = loke)、主の矢、つまりシヴァの矢は望まれない所、悪い行き先へと赴いた。こなごなになってしまったという意味である。そしてまた大地 (jagatīm = pṛthvīm) を痩せ細らせる者 (śyanti = tanūkurvantīti)、つまりダヌの子孫達を—Pāṇini 3.2.3: āto 'nupasarge kaḥ〔基づいて動詞語根śo の後に kṛt 接辞 Ka が導入される〕—殺す者が大地を痩せ細らせる者

問題の詩節で Bhāravi は全脚をなす音節を同一音節で反復している。しかし (a)(b)(c) は同一語でありかつそれぞれ「赴いた」、「大地」、「矢」という同義を表示するので詩節全体では〈同音群反復〉と〈疑似同音群反復〉が融合している。〈同音群反復〉に対する Bhāravi の自由な著作姿勢は賛歌にのみ限定されるものではないことが分かる。従って以上の *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節における〈同音群反復〉の特徴を我々は次のように要約できよう。

(1) 詩論家の定義に従う〈同音群反復〉の用例は少ない。
(2) 残余の多くは〈疑似同音群反復〉もしくは〈同音群反復〉と〈疑似同音群反復〉との融合形に分類される。
(3) 不厳密な〈同音群反復〉の適用例は *Kirātārjunīya* 第 15 章にも認められ、*Kirātārjunīya* 全体を通じて〈荘厳法〉としての〈同音群反復〉が円熟していない。

3 〈同音群反復〉から見た *Kirātārjunīya* 18 章第 22–43 詩節の文学史的位置

3.1 Mātṛceṭa

次に *Kirātārjunīya* 第 18 章 22–43 詩節の古典文学史上の位置付けについて考えてみよう。この問題を検討するにあたっては仏教詩人 Mātṛceṭa (四世紀以前) の二篇の仏讃が参考になる[30]。すなわち *Prasādapratibhodbhava* (『浄心による英知の生起』) と *Varṇārhavarṇa* (『賞賛に値する者の賞賛』) である。両作品には讃詠上の効果を高める目的で適用された〈同音群反復〉を我々は顕著に認めることができる。今ここに HARTMANN [1987] の先行研究に基づきその用例を *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節のそれと比べると興味深い事実が浮上する[31]。

3.1.1 音節の一部が反復されないもの

まず音節の一部が反復されない、*Kirātārjunīya* 第 18 章第 30、38–40 詩節に適用された〈疑似同音群反復〉と同じ用例を見よう。

[*Prasādapratibhodbhava* 20]
nākṛtvā duṣ**karaṃ kar**ma dur**labhaṃ labh**yate padam |
ity ātmanirapekṣeṇa vīryaṃ saṃvardhitaṃ tvayā ||

達を殺す者である。〔Pāṇini 3.2.76: kvip ca に基づいて〕Ṇi で終わる動詞語根 mṛ の後に kṛt 接辞 KvIP が起こっている。そのような者達であってガナ、つまりプラマタである者達が大地を痩せ細らせる者達を殺すガナ達であり、彼等は歓喜を (vikāśam = ullāsam) 覚えた。喜んだという意味である。『あぁ、神の所にまでこの者 (= アルジュナ) の武勇が広まった』と考えて驚愕したので〔歓喜した〕ということが意図されている。その時、求める者達は (mārgaṇāḥ = anveṣakāḥ)〔虚空へ赴いた〕。〔Pāṇini 3.3.113: kṛtyalyuṭo bahulam に基づいて動詞語根 mārg の後に〕行為主体の意味で kṛt 接辞 LyuṬ が導入されている。世界の主、つまり三界の主を求める者 (mārgaṇāḥ = anveṣakāḥ)、シヴァに見えようとする神々と聖仙を始めとする者達である。〔vikāśa は属格限定複合語で〕鳥達が (vīnām = pakṣiṇām) 飛び交う場所 (kāśaḥ = gatir atra) と分析される。つまり虚空へと彼等は赴いた。」)

[30]Mātṛceṭa の年代を確定することは難しい。彼の著作にはカニ (シ) カ王に宛てた書翰文学 (epistle) としての *Mahārājakanikalekha* (『大王カニカへの書翰』) がある。しかしカニシカ王の即位年代の問題は決着を見ておらず、カニシカを名乗る王は少なくとも三人いたことが知られている。従って Bu ston や Tāranātha の史書、義浄の『南海帰寄内法伝』の記述を勘案し Mātṛceṭa の年代を西暦 160 年から 260 年の間ないしはそれより 100 年前に置く見解が踏襲されて来た。HARTMANN [1987: 36–37] は以上の資料の信憑性を問題視し、*Prasādapratibhodbhava* の最古の貝葉写本が五世紀に属すこと、『摩訶般若波羅蜜経釈論』(T No. 1509) 及び『毘婆沙論』(T No. 1547、380 年) を始めとする複数の毘婆沙文献に *Varṇārhavarṇa* からの引用があることに基づき Mātṛceṭa の年代の下限を四世紀初頭以前に定める。この他の Mātṛceṭa の年代に関する議論及び *Mahārājakanikalekha* については DIETZ [1984: 37–45] を参照せよ。

[31]以下引用する詩節と註釈のテキストは SHACKLETON BAILEY [1951] 及び HARTMANN [1987] に基づく。

なされ難い行為をなさずには、得難い境地 (= 如来の知) は得られないと考えて[32]、爾は自分のことを顧慮せず、精神力を培った。

前半二脚に Mātṛceṭa が音節の反復を試みた形跡がある。問題の箇所を構成する語の形を示すならば次の通りである。

a	duṣ**karaṃ**	< duṣkara <duḥkhena kriyata iti>	Acc. sg. n.
	karma	< karman	Acc. sg. n.
b	dur**labhaṃ**	< durlabha <duḥkhena labhyata iti>	Nom. sg. n.
	labhyate	< labh	3rd. sg. pres. Pass.

Mātṛceṭa が a 句と b 句でそれぞれ動詞語根 kṛ「なす」と labh「得る」から派生する名詞もしくは定動詞を用いて反復を試みていることが分かる。しかし同じ音節の反復としては不完全である。これと同様の例を我々は *Varṇārhavarṇa* にも見ることができる。

[*Varṇārhavarṇa* 2.54–55]
na tato 'sty uttarataraṃ **padaṃ pada**vidāṃ varaḥ |
yat **padaṃ** tvam abhijñāya dvi**padāṃ** śreṣṭhatāṃ gataḥ ||
anuttara**pada**jñāya sarvā**pada**pahāriṇe |
a**padā**yānu**pādā**ya dvi**padā**grāya te namaḥ ||

[54] その〔境地〕を越える境地はないのだ。境地を知る者達のうちで最も優れている爾がその境地を知り、二本足の者達のうちで最も秀でた者となったのだから。
[55] 無上の境地を知り、あらゆる不幸を除き、その歩んだ道を〔誰も〕たどることのできない[33]、生存に執着しない[34]、二本足の者達のうちで傑出した爾に頂礼あれ。

問題の詩節で同音が反復されている箇所の文法構造は次の通りである。

第 54 詩節			
b/c	**padaṃ/pada°**	< pada	Nom. sg. n./—
d	dvi**padāṃ**	< dvipad <dve padau yeṣām>	Gen. pl. m.
第 55 詩節			
a	°**pada**jñāya	°padajña <padaṃ jānātīti>	Dat. sg. m.
b	°**āpada**pahāriṇe	°āpadapahārin <āpado apaharatīti>	Dat. sg. m.
c	a**padā**ya	apada <na vidyate padaṃ yasya>	Dat. sg. m.
	anu**pādā**ya	< an-upâ-dā + LyaP	ind.
d	dvi**pada°**	dvipada° <dvau padau yeṣām>	—

第 54 詩節では pada「境地」と pad「足」、第 55 詩節では pada「境地」と āpad「不幸」、pāda「行跡」、anupādāya「執着せず」、pada「足」で Mātṛceṭa は音節の反復を試みている。しかし第 54 詩節 bc 句では同一語を同義で反復しており、剰え一回目の反復ではアヌスヴァーラを介在させている。更に d 句では語と語義は異なるものの padaṃ と反復すべきを padāṃ と反復している。第 55 詩

[32] HARTMANN [1987: 122] が指摘するように Mātṛceṭa は pada「境地」を「悟り」、「涅槃」の類義語として用いているようである。Nandipriya は「如来の知」(tathāgatajñāna) を指すと説明する。Nandipriya on *Prasādapratibhodbhava* 20 (49.14–16): *go 'phang* zhes bya ba ni sems can thams cad la bskyab pa'i phyir na de bzhin gshegs pa'i ye shes te | gzhan gyi don ma lus pa'i rten yin pa'i phyir ro |（「境地 (go 'phang = *pada) とは、一切衆生を救うものであるから (sems can thams cad la bskyab pa'i phyir = *sarvasattvatāyitvāt)、如来の知 (de bzhin gshegs pa'i ye shes = *tathāgatajñāna) のことである。というのもそれは他者の余す所なき利益の拠り所であるからである (gzhan gyi don ma lus pa'i rten yin pa'i phyir ro = *akhilapararthāśrayatvāt)。」）

[33] apada については BHSD s.v. を参照せよ。

[34] anupādāya については BHSD s.v. を参照せよ。Mātṛceṭa がこの箇所で連続体を用いていることについて HARTMANN [1987: 60] は「どうやらこの箇所では語の音の価値が、詩の文法的な正確さよりも重要視されているようだ」と述べる。

節の前半二脚では詩論家の規定を守っているが、後半二脚での二回の反復は padā という音節を反復すべきを pādā と反復している。また同じ箇所で Mātṛceṭa は同音を反復させようとするあまり、連続体 anupādāya「執着することなく」の文法的な本来の機能を無視して、単なる te「爾」に掛かる限定句として使用するという文法上の欠陥を生んでいる。

3.1.2.　同一同義語が同じ形で反復されるもの

この形式に属す〈疑似同音群反復〉は Mātṛceṭa の仏讃では *Kirātārjunīya* に比べ一層顕著に見出される。代表例として *Prasādapratibhodbhava* 第 95–97 詩節を見よう。

[*Prasādapratibhodbhava* 95–97]
śrī**karaṃ** te 'bhigamanaṃ sevanaṃ dhī**karaṃ** param
bhajanaṃ nirbhaya**karaṃ** śaṃ**karaṃ** paryupāsanam ||
śīlopa**sampadā** śuddhaḥ prasanno dhyāna**sampadā** |
tvaṃ prajñā**sampadā**kṣobhyo hradaḥ puṇyamayo mahān ||
rūpaṃ draṣṭavya**ratnaṃ** te śravya**ratnaṃ** subhāṣitam |
dharmo vicāraṇā**ratnaṃ** guṇa**ratnā**karo hy asi ||

[95]　爾のもとへ向かって行くことは繁栄をもたらし、爾に仕えることは智慧を格別にもたらし[35]、爾を崇敬することは〔悪い生まれ先に対する〕恐怖の払拭をもたらし[36]、爾に侍することは楽をもたらす。
[96]　爾は善き品行を完成させているので清浄であり、心を集中させることを完成させているので澄明を得ており、智慧を完成させているので揺れ動くことのない、福徳を湛える大きな湖である。
[97]　爾の姿は諸々の見られるべきもののうちで宝珠であり、爾が口にする優れた言葉は諸々の聞いて学ばれるべきもののうちで宝珠であり、爾が説く法は諸々の考究されるべきもののうちで宝珠である[37]。実に爾は優れた性質という宝珠を産する鉱山である。

第 95、96、97 詩節でそれぞれ °kara、sampad、ratna という語が「・・・をもたらす」、「完成」、「宝珠」という同一義で反復されている。この〈疑似同音群反復〉は *Kirātārjunīya* 第 18 章第 41 詩

[35]Nandipriya 註の解釈に従う。Nandipriya on *Prasādapratibhodbhava* 95 (106.4–6): nye bar phyin nas chos thos pa'i sbyar bas *bsten pa* ni kha na ma tho ba dang bcas pa dang | kha na ma tho ba med pa yongs su shes pa'i phyir *blo gros su gyur pas* na shes rab bskyed par mdzad pa zhes bya ba'i don do |（「〔爾の〕近くに来てから (nye bar phyin nas = *upagamya)、法の聴聞を実践することを通じて (chos thos pa'i sbyor bas = *dharmaśruti-prayogena) 仕えることは (bsten pa = *sevana)、過失のある者 (kha na ma tho ba dang bcas pa = *vadya) とそうでない者 (kha na ma tho ba med pa = *anavadya) とを完全に理解することを根拠とする (yongs su shes pa'i phyir = *parijñānena) 思慮をもたらすので (blo gros su gyur pas = *dhīkareṇa)、智慧を生ぜしめるという意味である (shes rab bskyed par mdzad pa zhes bya ba'i don to = *prajñotpādaka ity arthaḥ)。」）

[36]Nandipriya on *Prasādapratibhodbhava* 95 (106.8–9): *'jigs pa med par mdzad pa* ni ngan song gi 'jigs pa las 'das pa'i phyir ro |（「恐怖の払拭をもたらす ('jig pa med par mdzad pa = *nirbhayakara) というのは、悪い生まれ先に恐怖を抱くことを超越しているからである (ngan song gi 'jigs pa las 'das pa'i phyir ro = *atikrāntadurgatibhayatvāt)。」）

[37]SHACKLETON BAILEY [1951: 170] は draṣṭavyaratnam、śravyaratnam、vicāraṇāratnam の三箇所を同格限定複合語に解しているようである。Nandipriya はこれらを属格限定複合語に解す。draṣṭavyaratnam に対する彼の語釈は次の通り。Nandipriya on *Prasādapratibhodbhava* 97 (107.18–20): *bltar 'os pa* ni bltar 'os pa'i nang na *rin chen* te | mtshan la sogs pa phun sum tshogs pas na dad par 'os pa nyid kyis phan par mdzad pa'o |（「見られるべきもの (bltar 'os pa = *draṣṭavyānām) すなわち見られるに値するものの (bltar 'os pa = *draṣṭum arhānām) うちで (nang na = madhye) 宝珠 (rin chen = *ratna) であり、〔爾は偉人の〕身体的特徴などを具備していて (mtshan la sogs pa phun sum tshogs pas na = *lakṣaṇādisaṃpannatvāt)、〔人が〕浄心を起こすに値する者であるから (dad par 'os pa nyid kyis = *śraddhayitavyatvāt) 大切にされる (phan par mdzad pa'o = *upakṛto 'si)。」）

節に用いられているものと形式上全く同じである。

以上の〈同音群反復〉及び〈疑似同音群反復〉の用例を *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節のそれらと比較すると、両者の間に次のような関係が指摘できよう。

(1) 〈疑似同音群反復〉が数量的に卓越する点は *Kirātārjunīya* と共通する[38]。

(2) しかし Mātṛceṭa は〈同音群反復〉を適用する際、しばしば正規の梵語文法を逸脱する欠陥を生んでいる[39]。Bhāravi の賛歌はこの欠陥を免れている。

(3) 以上の事実を踏まえると、Bhāravi の時代には〈言葉の荘厳法〉を文法家が規定する梵語の枠組みの中で適用しようとする意識が詩人達の間に生じていたことが推定される。

3.2 Mayūra

次に、Bhāravi の約百年後 Harṣa 王 (七世紀) の宮廷詩人として活動した Mayūra の賛歌 *Sūryaśataka* (『太陽神百頌』) を見よう。ここに取り上げるのはその第 38 詩節である[40]。

[*Sūryaśataka* 38]
sānau sā naudaye nāruṇitadalapunaryau**vanānāṃ vanānām**
ālīm ālīḍhapūrvā parihṛtakuharopān**tanimnā tanimnā** |
bhā vo 'bhāvopaśāntiṃ diśatu dinapater bhā**samānā samānā**
rājī rājīvareṇoḥ samasamayam udetī**va yasyā vayasyā** ||

日が昇る峰では赤く染められた葉々で若さを再び得る、連なる森を必ず最初に味わい始めて[41]、細さゆえに諸々の洞穴の入り口にも奥にも行きわたる[42]、日の主 (= スールヤ) の光が輝きながら貴方様に不幸の消滅をもたらさんことを。その光と時を同じくして、遜色のない女友達のような一列の蓮の花粉が舞い上がる[43]。

---

[38]文学作品としてのジャンルを異にするものの、HAHN [2007: 22–26] の分析結果を踏まえると、我々は同様の傾向を Haribhaṭṭa (五世紀) の *Jātakamālā* に適用される〈同音群反復〉にも認めることができる。HAHN [2007] が指摘する Haribhaṭṭa の〈同音群反復〉の特徴を要約すれば次の通り。(1) 後代の大美文詩に特徴的な、純粋に技巧的な種類の〈同音群反復〉は Haribhaṭṭa の作品に見出されない。(2) 意味を犠牲にして欠陥のない〈同音群反復〉を構成することよりも寧ろ、問題なく意味を保ち、それと引き換えに Haribhaṭṭa は言葉の余り重要でない不一致を許容することを優先している。(3) 詩論家達の規定から彼が距離を置いていたことを示すもう一つの例が、同一動詞語根に基づく異なる派生語 (例えば kṛtvā、°kāra、akarot、kṛtin など) を用いた、詩論家達の規定に現れない〈同音群反復〉を用いていることである。

[39]Mātṛceṭa の仏讃における文法上の非正規表現については HARTMANN [1987: 60] を見よ。これら非正規表現が〈同音群反復〉もしくは〈疑似同音群反復〉が適用されている詩節に顕著に現れることは注目されてよい。例えば *Varṇārhavarṇa* 1.1, 2.60, 2.70, 3.12, 8.15 を参照せよ。

[40]以下引用するテキストは DURGĀPRASĀDA and PARABA eds., Bombay: NSP, 1889 に基づく。

[41]この箇所について Tribhuvanapāla は yā *vanānāṃ* kānanānām *āliṃ* paṅktiṃ *na na ālīḍhapūrvā*, api tv *ālīḍhapūrvaiva* (21.7–8) (「連なる森 (vanānām ālim = kānanānāṃ paṅktim) を最初に味わい始めないことがない、そうではなくて必ず最初に味わい始める〔スールヤの光〕」) という語釈を与えるのみである。しかし校訂者が注記するように Mayūra はここで Pāṇini 3.4.71: ādikarmaṇi ktaḥ kartari ca を前提としており、この文法規則を援用しなければ問題箇所は解釈できない。QUACKENBOS [1917: 154] は "I have taken *ālim*, 'row' as a kind of object of *ālīḍha*, 'licked'." という注記を付すが、その根拠となる Pāṇini 3.4.71 に触れていないのは遺憾である。

[42]parihṛta に対し Tribhuvanapāla は語釈を与えておらず、これをどう解釈するかが難しい。QUACKENBOS [1917: 153] は "penetrates" という訳語をあてる。しかし動詞語根 pari-hṛ から「貫く」という意味は語源的に派生しないはずである。APTE 及び pw は PW が挙げる pari-hṛ の意味の他にいくつか別の意味を挙げるが、残念なことにその多くは出典不明である。実作品の用例がない点に問題があるが、ここでは parito hṛta°「完全に打ち勝った」すなわち「洞穴の入り口にも奥にも行き渡った」ということが言いたいのではないか。

[43]Tribhuvanapāla 註に従う。Tribhuvanapāla on *Sūryaśataka* 38 (21.6–7): yasyāḥ *samasamayam* ekakālaṃ *rājīvareṇoḥ* padmaparāgasya *rāji* paṅktir *udety* udgacchati | *vayasyeva* sakhīva | yā *samānā* tulyā | (「それ (= スールヤの光) と時を同じくして (samasamayam = ekakālam)、一列の (rājiḥ = paṅktiḥ) 蓮の花粉 (rājīvareṇoḥ =

a	**sānau**	< sānu	Loc. sg. m.
	sā naudaye	< tad/na/audaya	Nom. sg. f./ind./Loc. sg. m.
	°punaryau**vanānāṃ**	< punaryauvana <punar yauvanaṃ yeṣām>	Gen. pl. n.
	vanānām	< vana	Gen. pl. n.
b	**ālīm**	< ālī	Acc. sg. f.
	ālīḍha°	< ālīḍha < ā-lih + Kta	—
	parihṛtakuharopān**ta-**	< parihṛtakuharopāntanimna <parihṛtāni	
	nimnā	kuharopāntanimnāni yayā>	Nom. sg. f.
	tanimnā	< taniman	Inst. sg. m.
c	**bhā vo**	< bhā/yuṣmad	Nom. dg. f./Dat. pl.
	'bhāvopaśāntiṃ	< abhāvopaśānti <abhāvasyopaśāntir>	Acc. sg. f.
	bhā**samānā**	< bhāsamāna < bhās + ŚānaC	Nom. sg. f.
	samānā	< samāna	Nom. sg. f.
d	**rājī**	< rājī	Nom. sg. f.
	rājīva°	< rājīva°	—
	iva yasyā	< iva/yad	ind./Gen. sg. f.
	vayasyā	< vayasya	Nom. sg. f.

Mayūra は各脚頭と脚末のそれぞれ四音節、六音節に〈同音群反復〉を適用する。この用例を Bhāravi のそれと比べると我々は次の二つの特徴に気付く。その第一は b 句冒頭で鼻音を介在させている一箇所の例外を除き、残る七箇所で Mayūra が同一音節を正確に反復させていることである。このことは〈同音群反復〉に対する詩論家の規定が七世紀頃には詩人達の間に定着していたことを示している。特徴の第二は例えば *Kirātārjunīya* 第 15 章第 35 詩節に見られるような、意味を変え同一語を反復する〈同音群反復〉が影を潜め、語の一部をなす音節を用いた〈同音群反復〉が専ら用いられていることである。このことは〈同音群反復〉が単に朗詠効果を生む手段としてだけでなく、言語の芸当を披歴する手段にもなり始めていたことを示唆する。これは〈同音群反復〉と密に関係する〈荘厳法〉である〈掛詞〉(śleṣa) に関して、この時代の詩人達の関心が同一文で二義を表示する〈意味の掛詞〉(arthaśleṣa) から、同一音節で複数文を表示する〈言葉の掛詞〉(śabdaśleṣa) へと移行し始めていたこととも関係していると考えられる。

ところが *Sūryaśataka* における〈同音群反復〉の適用例と明確に見なすことができるのは問題の一詩節のみである[44]。*Sūryaśataka* の模倣作品とされる Bāṇa の *Caṇḍīśataka* (『チャンディー女神百頌』) では〈同音群反復〉は全く用いられていない。その理由は全く不明であるが、〈荘厳法〉として〈同音群反復〉が円熟する時期には〈同音群反復〉を適用した賛歌という文学形式が詩人に顧みられなくなっているのである。他方これに代わって用いられるのは〈同子音反復〉(anuprāsa) である[45]。

[*Sūryaśataka* 33]
bhūtvā jam**bha**sya **bh**ettuḥ kaku**bh**i pari**bh**avāram**bh**a**bh**ūḥ śu**bh**ra**bh**ānor
bi**bh**rāṇā ba**bh**ru**bh**āvaṃ prasa**bh**aṃ a**bh**inavām**bh**ojajṛm**bh**āpragal**bh**ā |
bhūṣā **bh**ūyiṣṭhaśo**bh**ā tri**bh**uvana**bh**avanasyāsya vai**bh**ākarī prāg
vi**bh**rānti **bh**rājamānā vi**bh**avatu vi**bh**avo**dbh**ūtaye sā vi**bh**ā vaḥ ||

明け方に朱色を帯び、ジャンバをはっきりと分かるように切り裂く者 (= インドラ) がいる方角で、白い光を放つ者 (= 月) を凌ぎ始めるだけの資質をそなえるようになってから、新しい蓮華を開かせる力があり美しさに満ち溢れる、この三界という御殿の

---

padmaparāgasya) が舞い上がる (udety = udgacchati)。女友達のような (vayasyeva = sakhīva)。遜色のない (samānā = tulyā)〔女友達〕。」)

[44]QUACKENBOS [1917: 92] はこの他に第 71、81、94 詩節を〈同音群反復〉の例として挙げる。しかしこの三詩節で Mayūra が〈同音群反復〉を意図していたかはかなり疑わしい。

[45]以下 anuprāsa に対し〈同子音反復〉という訳語を用いるが、これは「同一子音が母音の如何に関係なく複数回反復される〈言葉の荘厳法〉の一種」を指すことをお断りしておく。GEROW [1971: 102–107] を参照せよ。

装飾具である、光を集める者 (= スールヤ) から生まれるその光が違わず輝いて[46]、貴方様の富を増大させるだけの力を持つものとならんことを。

詩脚全体で bh 音が 29 回、v 音が 13 回反復されている。Mayūra は同種の〈同子音反復〉を作品全体で六詩節に適用する[47]。もっとも以上の〈同子音反復〉には詩節内容を補強する役割は未だ与えられていないが、Mayūra の時代の宗教叙情詩人達の関心が〈同音群反復〉から〈同子音反復〉に移っていたことが推定されよう[48]。

4 結論

以上の考察から次の結論が導かれよう。

(1) Bhāravi が *Kirātārjunīya* で用いる〈同音群反復〉は詩論家の規定に対し自由であり、Mātṛceṭa が仏讃で用いるものに近い。しかし後者は〈同音群反復〉を適用する際、文法家の規定をしばしば逸脱する。他方前者にはそれが見られない。Bhāravi の時代には文法家が定める言語運用の枠組み内で〈同音群反復〉を用いる姿勢が詩人間に定着していたことが推定される。

(2) 技巧面から判断し、Mayūra の賛歌に見られる〈同音群反復〉は Bhāravi のそれに比べ円熟度を増していると言える。しかし Mayūra の賛歌には〈同音群反復〉を詩節に用いた例がほとんどない。このことは七世紀以降、賛歌に〈同音群反復〉を用いる作風が廃れていたことを示唆する。それぞれヴィシュヌ、チャンディーを讃える内容である Māgha の *Śiśupālavadha* (『シシュパーラの殺戮』) 第 14 章第 71–86 詩節、Ratnākara の *Haravijaya* (『シヴァの勝利』) 第 47 章に〈同音群反復〉の用例がない事実はこのことを裏付ける。

確かに Bhāravi の〈同音群反復〉は言語の芸当としては秀でていると言えない。しかし非文法的表現に依らず〈同音群反復〉を用いた点では、二大叙事詩を含め Kālidāsa 以前の詩人の作品を凌駕している。また彼が詩論家による〈同音群反復〉の規定を意識し過ぎなかったことは逆に文体の簡潔明快さをもたらしている。Ratnākara が規定を重んじるあまり、季節や戦争の描写場面で多数の不自然な文を生んだのと対照的である。正しい言葉を用いた素朴な文体という特徴こそが、インドの伝統的な詩論家のみならず、西洋の研究者が *Kirātārjunīya* に高い評価を与えた理由であろう。

---

[46] d 句冒頭の vibhrānti の解釈が難しい。Tribhuvanapāla 註はこれを bhrājamānā「輝く」を限定する副詞に解釈する。この解釈自体には問題ない。しかし彼はこの語に対する語釈もしくは言い換えを与えていない。QUACKENBOS [1917: 147] は "dazzlingly" と解釈し、SCHMIDT, Nachtr はこの箇所を出典として „flammend" という訳語をあてている。しかし動詞語根 vi-bhram が「輝く」という意味で用いられている用例は管見の及ぶ限り見出されない。寧ろ vigatā bhrāntir yasmin karmaṇi tad sā yathā tathā「迷わず」、「違わず」という副詞に解釈するのではないか。

[47] 用例については QUACKENBOS [1917: 91] を見よ。

[48] 〈同子音反復〉が賛歌の詩節の意味補強を目的として適用されている例としては *Haravijaya* 第 47 章 *Caṇḍīstotra*「チャンディー女神への賛歌」第 162 詩節が参考になろう。テキストは DURGĀPRASĀDA and PARABA eds., Bombay: NSP, 1890 に従う。

[*Haravijaya* 47.162]
tvatsaṃśrayān girinadīkuharāntarālavṛttiḥ surañjitamukho na hinasti nūnam |
uddāmadānajala**k**uñjara**k**umbha**k**ūṭa**k**uṭṭā**k**a**k**oṭi**k**arajaḥ**k**ra**k**aco 'pi siṃhaḥ ||

山や河、洞穴の中で活動する、顔がとても赤く染まった獅子は、イコル液をとめどなく流す象のこめかみの突起をその鉤が切り裂くのに長けた、鋸のような爪をしているにもかかわらず、爾 (= チャンディー) に身を寄せる者達をきっと害さないに違いない。

ここでは獅子の鉤爪の音を連想させる意図で k 音による〈同子音反復〉が適用されていることが指摘できよう。

付論 I　*Avadānakalpalatā* 第 73 章 Nāgadūtapreṣaṇa 和訳研究

以下に *Avadānakalpalatā* 第 73 章 Nāgadūtapreṣaṇa (「龍への使者の派遣」) の和訳を試みる。和訳の底本としたテキスト、参照した本文批判ならびに梵文写本、チベット訳は次の通りである。[Ed.] DĀS and VIDYĀBHŪṢAṆA eds., Bombay: The Baptist Mission Press, 1918, pp. 584–593. Cf. DE JONG [1979: 160–161]. [Mss.] A294b1–296a4; E731a–74a4; Z476a3–478b1; D163b1–166a5. [Tib.] Z476a4–478b2; D163b2–166a6; P283a3–284b2; G356b4–358b2; N253a2–254a7.

先行訳としては VAIDYA の教本 (Darbhanga: The Mithila Institute, 1959) に基づく全訳が引田 [2004: 348–352] に発表されている。しかし同訳は自由訳に近いものであり、その性格に照らし本訳ではその問題点を逐一指摘していない。訳注はテキスト解釈に関するものに限定した。本章は 28 詩節からなり、うち 23 詩節の韻律は anuṣṭubh である。残る五詩節の韻律の内訳は upajāti (第一詩節)、drutavilambita (第 28 詩節)、vasantatilakā (第 14、17 詩節)、mandākrāntā (第 16 詩節) である。anuṣṭubh の正規形と非正規形の内訳は以下の通りである。

pathyā	2–4, 5c, 6a, 7–13, 18–20, 21a, 22a, 24–26 27	38	82.61%
na-vipulā	5a, 15ac, 22c, 23a	5	10.87%
bha-vipulā	23c	1	2.18%
ma-vipulā	6c	1	2.18%
ra-vipulā	21c	1	2.18%
総計		46	100%

さて岡野 [2005] が指摘するように、本章をなす詩節の大部分は、中世ネパールで編纂された説話集 *Aśokāvadānamālā* (『アショーカ王のアヴァダーナの花環』) 第七章 Triratnabhajanānuśaṃsa (「三宝敬礼の賞賛」) に引用されている。今ここに詩節の改変の程度を問わず、*Aśokāvadānamālā* に *Avadānakalpalatā* から一詩脚以上の引用が行われている箇所とその引用元を示すならば、次の通りである (*Aśokāvadānamālā* の対応箇所は NGMPP 収録写本 No. B94/7 の貝葉番号と行数に相当する)[1]。

Av-klp Chap. 73 Nāgadūtapreṣaṇa	AAv-m Chap. 7 Triratnabhajanānuśaṃsa
v. 1	64b10–11
v. 2cd	64b12
v. 3d	65a1
vv. 4–8	65a1–4
v. 9	65a5
vv. 11–12	65a10–11
v. 13cd	65a13
vv. 14–17	66a7–11
v. 18ab	66a13
vv. 19–20	66a15–66b1
v. 21	66b4–5
vv. 24cd–25ab	67b4
v. 28	67b6

Aśokāvadānamālā 第七章はジャヤシュリー (Jayaśrī) 長老による比丘達への語り掛けの形で龍への使者の派遣物語を伝える。しかし同章が著された目的がこの物語を聞衆に魅力的な形で提示することにあったのではなく、聞衆の布教にあったことは章末の内容から明らかである。アショーカ王が龍を調伏するのを成功させたインドラ長老は彼に三宝の敬礼がもたらす果を次のように説く。すなわち彼は、およそ誰であれ仏陀と彼の法 (subhāṣita)、彼の僧団をそれぞれ身の寄せ場と

[1]詩節をなす字句の借用に関しては、*Aśokāvadānamālā* 65a8–9 及び 66b14–15、67b5 にそれぞれ *Avadānakalpalatā* 第 73 章第 10、22、27 詩節から字句を借用した形跡が認められる。

し聴聞し供養する者は完全な悟り (sambodhi) を得、極楽浄土 (sukhāvatī) に赴き、良い生まれ先 (sugati) を得ると言う[2]。アショーカは彼の言葉に従い三宝を拠り所とし菩提行を実践する[3]。三宝供養の重要性を説く人物の役と、供養を実践する人物の役を物語の主な登場人物に付託する形式は *Aśokāvadānamālā* 第二章 Upagupta と同じである[4]。

和訳研究にあたって *Aśokāvadānamālā* 所引の詩節と引用元の *Avadānakalpalatā* の詩節との対校は行っていない。これは *Aśokāvadānamālā* の写本が *Avadānakalpalatā* の現存写本に存する誤写を例外なく踏襲しているだけでなく、テキストの改変部分や筆写伝承過程で生じたと思われる二次的な誤写を含んでいることによる。

[1] 題辞

akhaṇḍitaṃ śāsanam āyatā śrīr yaśas tuṣārāṃśuśatāvadātam |
āścaryacaryāruciraḥ prabhāvaḥ phalāṃśaleśaḥ sugatārcanasya || 73.1 ||

[294b1] akhaṇḍitaṃ śāsanam āyatā śrīr yaśas tuṣārāṃśuśatāvadātaṃ |
āścaryacaryāruciraḥ prabhā[2]vaḥ phalāṃśaleśaḥ sugatārccanasya

[476a3] || a kha ṇḍi taṃ shā sa na mā ya tā shrī rya shā stu ṣhā rāṃ shu sha tā ba dā taṃ |
| ā shtsa rya tsa ryā ru tsi raḥ pra bhā baḥ pha lāṃ sha le shaḥ su ga tā tstsa na sya |

| nyams pa med pa'i bka' dang yangs pa'i dpal |
| grags pa bsil zer byed pa brgya ltar dkar |
| ngo mtshar spyod pas mdzes pa'i mthu dag ni |
| bde gshegs mchod pa'i 'bras bu'i cha shas yin | 73.1 |

1a bka'] DZ; dka' PGN. **1d** 'bras bu'i] DZGN; 'bras ba'i P.

退け挫かれない命令、広きに知れ渡る栄誉、雪が放つ数百本もの光線のように白く眩い名声、驚愕に値する行いで輝く並外れた力[5]、〔これらは〕善逝を崇敬する行いがもたらす果の一部のまた一片なのである。

---

[2]AAv-m 67a13–15: ye buddhaṃ śaraṇaṃ gatvā smṛtvā bhajanti sarvadā | te saṃkleśavinirmuktāḥ sambodhipadam āpnuyuḥ || śṛṇvanti ye sadā śāstur upāśritya śubhāṣitaṃ (s.e. for *subhāṣitaṃ*) | mārapāśavinirmuktā te prayāyuḥ sukhāvatī (s.e. for *sukhāvatīm*) || ye bhajanti ca saṃghānāṃ (m.c. for *saṃghān*?) satkṛtya samupasthitāḥ | sadā te durgatiṃ hitvā sadgatim evam āpnuyuḥ || (「およそ仏陀という守護者の所に行き、常に彼を憶念し敬礼する者は、煩悩から自由となり、正しい悟りの境地を得ることになる。およそ師が発する優れた言葉 (= 法) を常に身の拠り所として、それに耳を傾ける者は、マーラの罠から自由になり極楽浄土に行くことになる。そしておよそ僧団というものを供養し近くで仕え敬礼する者は、常に悪い生まれ先 (= 地獄・餓鬼・畜生) を捨て、良い生まれ先 (= 人間・神) をこのように得ることになる。」)

[3]AAv-m 67b3: sadendrasyārhatas tasya sadguror upadeśataḥ | triratnaśaraṇaṃ kṛtvā bodhicaryārato 'bhavat || (「阿羅漢であり優れた師であるそのインドラの教えに従い、〔アショーカは〕常に三宝を身の寄せ場となし、菩提を得るために実践することを喜ぶようになった。」)

[4]山崎 [2012: 51–55] を参照されたい。

[5]不完全な形ではあるものの、c 句冒頭で Kṣemendra は音節の反復を試みている。また Kṣemendra が意識していたか否かは不明であるが、Ratnākara はこれと同種の技法を〈同子音反復〉とともに *Haravijaya* 第 37 章第 56 詩節に適用している。

[*Haravijaya* 37.56]
sa**cc**āpa**c**akra**c**atura**c**yutakā**ñc**anotthanārā**c**are**c**ita**c**amū**c**ara**c**akravālam |
āś**caryacaryac**aturā**ñc**ita**c**ārucar**c**a**c**andrāva**c**ūlam acirād raṇam astu **caṇ**ḍam ||

しなやかに円弧を描いた弓から素早く飛び出た、黄金でできた矢で一群の戦士達が士気を鼓舞され、月を印とする者 (= シヴァ) が、驚愕に値する行動をとり策に長けた者達に関してそこで尊敬に価する優れた省察を行う激しい戦闘が遠からず起こるに違いない。

[2] アショーカの出現

rājā śrīmān aśoko 'bhūt pure pāṭaliputrake |
dānārthānām abhūd yasya saṃkhyāśabdadaridratā || 73.2 ||

rājā śrīmān aśoko bhūt pure pāṭa ○ liputrake |
dānārthānām abhūd yasya saṃkhyāśabdadaridratā{m*} |

| rā dzā shrī mā na sho ka bhū tpu re pā ṭa li pu tra ke |
| dā nā rthā nā ma bhū dya sya saṃ khyā sha bda da ri dra tā |

2c dānārthānām] AEDZ; *dānārthinām Ex conj. Ed. **2d** °daridratā] A^{pc}EDZ (Ed.); °daridratām A^{ac}.

| grong khyer pa ṭa li pu trar | | rgyal po dpal ldan mya ngan med |
| byung ste gang gi sbyin pa don | | grangs kyi sgra yis dbul bar gyur | 73.2 |

2c gi] PGN; gis DZ. **2d** yis] DPGN; yi Z.

パータリプトラという都城に吉祥なるアショーカという王が現れた。彼が喜捨する諸々の財産を数で言い表すことはできなかった。

[3] 商人の訴え

taṃ kadācit sabhāsīnaṃ vaṇijo dvīpagāminaḥ |
sarvasvanāśaśokārtāḥ saniśvāsā *vyajijñapan || 73.3 ||

taṅ kadācit sabhāsīnaṃ vaṇijo dvīpāgāminaḥ [3] |
sarvvasvanāśaśokā(r)ttāḥ saniśvāsā vyajijñapuḥ ||

| taṃ ka dā tsi tpa bhā pī naṃ ba ṇi dzo dwi pa gā mi naḥ |
| sa rbba swa nā shru sho kā rttiḥ sa niḥ shwā sā bya dzi dznya yuḥ |

3b dvīpagāminaḥ] E (Ed.); dvīpāgāminaḥ A. dvipagāminaḥ DZ. **3d** *vyajijñapan] Ex conj.; vyajijñapuḥ AE (Ed.); vyajijñayuḥ DZ.

| nam zhig mdun sar 'khod de la | | tshong pa gling du 'gro ba po |
| bdog kun nyams pa'i mya ngan gyis | | gzir cing shugs ring ldan pas zhus | 73.3 |

3c bdog] DZ; mdog PGN. **3d** shugs ring] DZ; shugs rings PGN.

或る時、集会の場に座している彼に、島々を行く商人達は全ての所有物をなくした悲しみに苛まれ、溜息をついて言った[6]。

deva dīrghabhujacchāyāviśrāntabhuvanasya te |
rājye na dṛśyate kaścic cintāsaṃtāpitāśayaḥ || 73.4 ||

deva dīrghabhujacchā ○ yāviśrāntabhuvanasya te |
rājye na dṛśyate kaścic cintāsantāpitāśayaḥ ||

| de ba dī rgha bhu dza tstshā ya bi shra nta bhu ba na sya te |
[476b1] | rā dzye na dri shya te ka shtsi tstsi ntā pa ntā pi tā sha yaḥ |

| dpung pa'i grib ma ring po la | | srid pa ngal gso lha khyod kyi |
| rgyal srid dag na 'ga' zhig kyang | | re ba bsam pas gzir ba mthong | 73.4 |

[6]梵文写本二本は vyajijñapuḥ、梵文音写は vyajijñayuḥ という読みを示すが、vyajijñapan の誤写であろう。

4b srid] DPGN; srad Z. || gso] DZ; bso PGN. || kyi] PGN; kyis DZ. **4d** re ba] DZPG; ra ba N.

「王様、〔爾の〕長い腕が生む陰で〔爾が領有する〕世界は安寧を得ております。その爾が治める王国では、誰一人として不安に心苛まれている人を見ることはありません。」

asmākaṃ tu pravahaṇaṃ bhaṅktvā ratnadhanaṃ hṛtam |
kevalaṃ bhāgyadaurbalyān nāgaiḥ sāgaravāsibhiḥ || 73.5 ||

asmākan tu pravahaṇam bhaṃktvā [4] ratnadhana hṛta(m) |
kevalam bhāgyadaurbbalyān nāgaiḥ sāgaravāsibhiḥ ||

| a smā kaṃ tu pra ba ha ṇaṃ bhaṃ ktwā ra tna dha naṃ hri taṃ |
| ke ba laṃ bhā gya rdau rbba lyā nnā gaiḥ sā ga ra bā si bhiḥ |

| skal ba nyams chung 'ba' zhig las | | rgya mtshor gnas pa'i klu rnams kyis |
| bdag cag rnams kyi gzings bcag nas | | rin cen nor rnams phrogs par gyur | 73.5 |

5a skal ba] DZ; bskal pa PGN. || nyams] PGN; nyam DZ. || las] DZPN; la G. **5d** rin cen] DZ; rin chen PGN (also correct). || nor] DZ; snod PGN.

「しかしただ天運の悪さだけのせいで、海に棲む龍達が我等の船を破壊し、宝珠という富を奪いました。」

vayam anyatra jīvāmas tadupekṣā tu te vibho |
samudrayātrāvicchedāt kośaśoṣavidhāyinī || 73.6 ||

vaya ○ m anyatra jīvāmas tadupekṣyā tu te vibho |
samu(dray)ātrāvicchedāt kośaśoṣavidhāyinī ||

| ba ya ma nya tra dzī bā ma sta du pe kṣā tu te bi bho |
| sa mu dra yā trā bi tstshe dā tko sha sho ṣha bhi dhā yi nā |

6b °upekṣā] Ex conj. Tib. *btang snyoms* (Ed.); °upekṣyā AE; °upekṣa DZ. **6d** °śoṣa°] AEDZ, confirmed by *skam par* Tib. (DE JONG); *°śeṣa° Ex conj. Ed.

| bdag cag rnams ni gzhan du 'tsho | | khyab bdag de la btang snyoms ni |
| rgya mtshor 'gro ba chad pa las | | khyod kyi mdzod nyid skam par sgrub | 73.6 |

6b ni] PGN; na DZ.

「我等はよそで生活を営みましょう。しかし王様、爾が以上のことに対して見て見ぬふりをすれば、海を航行することが途絶えてしまうので、爾の蔵を枯渇させてしまうことでしょう。」

[4] アショーカの動揺

iti teṣāṃ vacaḥ śrutvā rājā saṃkrāntatadvyathaḥ |
samudrāntargatān nāgān vicintya stimito 'bhavat || 73.7 ||

iti teṣāṃ vacaḥ śru[5]tvā rājā saṅkrāntatadvyathaḥ |
samudrāntarggatān nāgān vicintya stimito bhavat* ||

| i ti te shā mba tsaḥ shru twā rā dzā saṃ krā nta ta dbya thaḥ |
| sa mu drā nta rga tā nnā gā n bi tsiṃ tya sti mi to bha ba t |

7b saṃkrānta°] ADZ (Ed.); saṃkānta° E.

| ces pa de dag tshig thos nas | | de dag gdung ba 'phos pa yi |
| rgyal pos rgya mtshor song ba'i klu | | rnam par bsams nas g.yo med gyur | 73.7 |

7b yi] PGN; yis DZ.

彼等の以上の言葉を聞き、王は彼等が味わった苦悩が自分にも伝わり、海の中にいる龍達のことをあれこれと考えて、動けなくなってしまった。

[5] インドラ比丘の提言

taṃ dṛṣṭvā niṣpratīkārakopavyākulamānasam |
indro nāmābravīd bhikṣuḥ ṣaḍabhijñaḥ sthito 'ntike || 73.8 ||

taṃ dṛṣṭvā niḥpratīkārakopavyākulamānasam* |
indro nāmābravīt bhikṣuḥ ṣaḍabhijñaḥ sthito ntike ||

| taṃ dri ṣhṭā ni ṣhpra tī kā sa ko pa byā ku la mā na saṃ |
| i ndra nā mā bra bī t bhi kṣhuḥ ṣha ḍa bhi dznyaṃ sthi to nti ke |

| yid ni khro bas 'khrugs gyur cing | | bcos thabs med pa de mthong nas |
| drung gnas mngon shes drug pa yi | | dge slong dbang po zhes pas smras | 73.8 |

8c drung gnas] DZ; drung nas PGN.

彼が何も手を打つことができず、心が怒りで震えているのを見て、近くにいた六神通をそなえたインドラという名の比丘は言った。

nāgānāṃ ratnacaurāṇāṃ tvatpratāpāgnisūcakaḥ |
tāmrapaṭṭārpito lekhaḥ preṣyatāṃ pṛthivīpate || 73.9 ||

nāgānāṃ ratna | [295a1] caurāṇāṃ tvatpratāpāgnisūcakaḥ |
tāmrapaṭṭārppitolekhaḥ prekṣyatāṃ pṛthivīpateḥ ||

| nā gā nāṃ ra tna tshau rā ṇāṃ twa tpra tā pā gni sū tsa kaḥ |
| tā mra pa ṭṭā rppi to le khaḥ pre ṣhya tāṃ pri thi bī pa te |

9d preṣyatāṃ] DZ (Ed.), confirmed by Tib. *spring bar mdzod*; prekṣyatāṃ AE. || pṛthivīpate] EDZ (Ed.), confirmed by Tib. *sa bdag*; pṛthivīpateḥ A.

| rin cen rkun po klu rnams la | | khyod mthu me ni go byed pa |
| zangs kyi glegs bu la bkod pa'i | | spring yig sa bdag spring bar mdzod | 73.9 |

9a rin cen] Z; rin chen DPGN (also correct). **9b** go] DZ; gos PGN.

「宝珠を盗んだ龍達に宛てて、爾が抱く火のような激しい苦しみを示唆する[7]、銅板に刻まれた書状を送ればよいでしょう。大地の主よ。」

---

[7]pratāpāgni° については二つの解釈が可能である。

第一解釈
前分要素 pratāpa を PW が挙げる訳語„Machtglanz, Majestät"の意味で解釈し、複合語を pratāpo 'gniriva「火のような威厳」という、比喩基準を後分要素とする同格限定複合語に分析するもの。
第二解釈
複合語解釈は第一解釈に同じで、前分要素 pratāpa を「激しい苦しみ」という意味に解釈するもの。

pratāpa を「激しい苦痛」という意味で用いる用例を辞書は挙げない。しかしこれを prāditatpuruṣa として prakṛṣṭaḥ tāpaḥ「卓越した苦痛」と解釈することは理論上可能であろう。実例についてはどうか。これについてはŚrīharṣa (12 世紀) の *Naiṣadhīyacarita* (『ニシャダ王の事績』) 第八章第 77 詩節の用例が参考になる。原文とそれに対応する Nārāyaṇa 註の説明は次の通りである。引用テキストはŚIVADATTA ed., Bombay: NSP, 1894 に従う。

[6] 龍への書翰の送付と彼等の拒絶

iti bhikṣuvacaḥ śrutvā lekhaṃ rājā visṛṣṭavān |
kṣiptam eva tam ambhodhau nāgās tīre pracikṣipuḥ || 73.10 ||

iti bhikṣuvacaḥ śrutvā lekhaṃ rājā visṛṣṭavān* |
kṣiptam eva tam ambhodhau nāgās tīre pracikṣipuḥ ||

| i ti bhi kṣhu ba tsaḥ shru twā le kha rā dzā bi sri ṣhṭa bā n |
| kṣhi pta me ba ta maṃ bho dhau nā gā stī re ṣhu pra bi puḥ |

| ces pa dge slong tshig thos nas | | rgyal po yis ni spring yig springs |
| chu gter dag tu 'phangs pa de | | klu rnams kyis ni ngogs su 'phangs | 73.10 |

10b yis] DZ; yi PGN. **10c** 'phangs] ZPGN; 'bangs D. **10d** kyis] DZ; kyi PGN.

以上の比丘の言葉を聞いて、王は書状を出した。海の中に実に投ぜられたそれを龍達は波打際に放り投げた。

[7] アショーカの苦悩

nṛpas tenāvamānena vicchāyavadanāmbujaḥ |
cintāsuptamatis tasthau śvasan nāsārpitāṅguliḥ || 73.11 ||

nṛpas te[2]nāvamānena vicchāyavadanāmbujaḥ |
cintāsuptamatis tasthau śvasan nāsā ○ rppitāṅguliḥ ||

| nri pa ste na bi mā ne na bi tstshā ya ba da nāṃ bu dzaḥ |
[477a1] | tsi ntā su pta ma ti sta sthau shwa sa nnā sa rpi tāṃ gu liḥ |

| ma bkur pa des mi bdag ni | | bzhin gyi chu skyes mdzes bral zhing |
| bsam pas blo nyal dbugs 'byin cing | | sna la sor mo bkod de gnas | 73.11 |

11b zhing] DZ; cing PGN.

[*Naiṣadhīyacarita* 8.77]
putrī suhṛd yena saroruhāṇāṃ yatpreyasī candanavāsitā dik |
dhairyaṃ vibhuḥ so 'pi tavaiva hetoḥ smarapratāpajvalane juhāva ||

蓮華達の友 (= 父スールヤ) に息子を持たせた、白檀香に香り付けられた方角 (= 南方) を最も好むその支配者 (= ヤマ) すらも、実に爾のせいで愛欲から生まれる激しい苦しみという火の中で堅忍不抜さを燃やしてしまった。

[Nārāyaṇa on *Naiṣadhīyacarita* 8.77 (341.3–6)]
vikāsakāritvāt *saroruhāṇāṃ suhṛt* sūryo *yena* kṛtvā *putrī* putravān, *candanena vāsitā* parimalāḍhyā *dik* dakṣiṇā *yatpreyasī* yasya priyatamā, *so 'pi* yamalakṣaṇo *vibhus tavaiva hetoḥ smarapratāpajvalane* kāmajanyasaṃtāparūpe 'nale *dhairyaṃ juhāva* | kāmajvaravaśād dhairyaṃ tyaktavān ity arthaḥ |

花を開かせるので蓮華達の友であるスールヤを彼 (= ヤマ) は息子を持つ者 (putrī = putravān) となしてから、白檀香で香り付けられた、つまり芳香で満ちた方角、つまり南方を彼 (= ヤマ) は最も好んだ (yatpreyasī = yasya priyatamā)。ヤマという名の支配者である彼も実に爾のせいで愛欲から生まれる激しい苦しみという火、つまり愛欲から生まれる苦痛という形をとった火の中で堅忍不抜さを燃やしてしまった。愛欲という病熱のせいで堅忍不抜さを捨てたという意味である。

第一解釈をとる場合、威厳が火に喩えられるのは一見奇妙であるが、威厳を太陽に喩える類似した表現は Vāmana (八世紀) の詩論書 *Kāvyālaṃkārasūtra* 2.2.22 に対する自註 *Vṛtti* (21.16) に現れる (頁行数は CAPPELLER ed., Jena: Verlag von Hermann Dufft, 1875 に従う)。従って威厳を火や太陽に喩えるのは美文詩人達の間では慣用的な表現であったようである。ここでは第二解釈をとっておく。*Kāvyālaṃkārasūtra* 中の用例については川村悠人氏の御教示に負う。

王は〔龍達の〕その侮蔑のせいで蓮華のような顔から色が失せてしまい、不安のせいで思考が働かなくなり、鼻に指をあてて、溜息をつき続けていた。

nidrā parāṅmukhī tasya klībasyevāṅganābhavat |
dīrghā tṛṣṇeva lubdhasya na ca rātriḥ kṣayaṃ yayau || 73.12 ||

nidrā parāṅmukhī tasya klīvasyevāṅganābhavat* |
dīrghā tṛṣṇeva lubdhasya na ca rātriḥ kṣaya ya[3]yau ||

| ni drā pa rā nggu khī ta sya klī ba sye bāṃ ga nā bha ba t |
| dī rghā tri ṣhṇe ba lu gdha sya na tsa rā triḥ kṣha yaṃ ya yau |

| ma ning la ni bud med bzhin | | de la gnyid ni phyir phyogs gyur |
| brkam chags can gyi sred pa ni | | ring bzhin mtshan mo zad ma gyur | 73.12 |

12c brkam] DZ; skam PGN. **12d** bzhin] DZ; zhing PGN.

眠りは彼を顧みなくなった。女が不能者を顧みないように。そして彼が明かす長い夜は終わりを迎えることがなかった。貪欲な者が抱く長きに及ぶ渇望がそうであるように。

[8] 神の出現

taṃ vyomadevatābhyetya parārthodyatam abhyadhāt |
upāye sati bhūpāla na cintāṃ kartum arhasi || 73.13 ||

tam vyomadevatābhyetya parārthodyatam abhyadhāt* |
upāye sati bhūpāla ○ na cintāṅ kartum arhasi ||

| taṃ byo ma de ba tā bhye tya pa rā rtho dya ta ma bhya dhā t |
| u pā yo sa ti bhū pā la na tsi ntaṃ ka rtu ma rha si |

| gzhan don sbyor ldan de la ni | | nam mkha'i lha mos mngon phyogs smras |
| sa skyong thabs ni yod pa la | | bsam pa bya bar mi 'os so | 73.13 |

13c sa skyong] DZ; sa skyongs PGN.

他者を益しようと努める彼に、虚空にいる神は近づいて言った。「すべはあるのだから、大地の守護者よ、貴殿はどうか不安を抱かれぬことを。」

ye pūjayanti jinam añjalirañjitena
mūrdhnā praṇāmapariṇāmamahārhapuṇyāḥ |
teṣāṃ surā api suvarṇavicitraśobhām
ājñāsrajaṃ vijayināṃ śirasā vahanti || 73.14 ||

ye pūjayanti jinam añjalirañjitena
mūrddhnā praṇāmapariṇāmamahārhapaṇyāḥ |
te[4]ṣāṃ surā api suvarṇavicitriśobhām
ājñāsrajam vijayināṃ śirasā vaha ○ nti ||

| ye pū dza ya nti dzi na ma nydza li raṃ dzi te na
mū rddhā pra ṇā ma pa ri ṇā ma ma ha rhā pu ṇyaḥ |
| te ṣhāṃ su rā a pi su ba stu bi tsi tra sho bhā m
ā dznyā sra dzaṃ bi dza yi nāṃ shi rā sā ba ha nti |

14a añjalirañjitena] AEDZ (Ed.), Tib. has *thal mo sbyar bas mtshan pas* (**añjalyaṅkitena* or **añjalilakṣitena*). **14b** °puṇyāḥ] Ex conj. Tib. *bsod nams can* (Ed.); °paṇyāḥ AE; °puṇyaḥ DZ. **14c** suvarṇa°] AE (Ed.); suvastu° DZ, Tib. has *dngos po mchog*.

| gang zhig phyag 'tshal yongs su bsngo bas cher 'os bsod nams can |
| spyi bo thal mo sbyar bas mtshan pas rgyal la mchod byed pa |
| rnam par rgyal ldan de dag bka' yi 'phreng ba rnam bkra zhing |
| dngos po mchog gis mdzes pa lha rnams kyis kyang spyi bor 'dzin | 73.14 |

14c 'phreng] DZ; phreng PGN (also correct). || zhing] DZPN; shing G. **14d** gis] PGN; gi DZ.

「〔勝者を〕礼拝する行いが形を変えて〔自らの〕福徳が大いに見上げたものとなった者というのは、合掌に魅力を添えられた頭で勝者を供養する。勝利を得るそのような者が与える、黄金のように驚くべき輝きを放つ命令という花環を神々でさえ頭につけるものだ。」

etad ākarṇya nṛpatiḥ prātaḥ snātaḥ śucivrataḥ |
siddhyai śuddhena manasā dhyātvā buddhaṃ samabhyadhāt || 73.15 ||

etad ākarṇṇya nṛpatiḥ prātaḥ (sn)āta(ḥ) (śuc)ivrataḥ |
siddhyai śuddhena manasā dhyātvā buddhaṃ samabhyadhāt ||

| e ta dā ka rṇya nri pa tiḥ pra ta snā twā shu tsi bra taḥ |
| si ddhyai shu ddhe na ma na sā dhya twā bu ddhaṃ sa ma bhya dhā t |

15c siddhyai] AEDZ (DE JONG), confirmed by Tib. *grub slad*; *siddhau Ex conj. Ed. **15d** buddhaṃ ADZ (Ed.); buddhaṃ buddhaṃ E (unmetrical).

| de thos nang par mi bdag ni || khrus byas brtul zhugs gtsang ldan pas |
| dag pa'i yid kyis sang rgyas ni || bsams nas grub slad rab smras pa | 73.15 |

15b byas] DG; bya ZPN. **15c** kyis] DZ; kyi PGN.

このことを聞いて、王は汚れのない誓戒を立て、薄明時に沐浴し、〔自分の目的を〕成就させるために澄んだ心で仏陀のことを深く考えて語り掛けた。

[9] アショーカの帰依文

sattvasmeraṃ sarasakaruṇākaumudīpūritāśaṃ
śāntyai kāntaṃ sakalatamasāṃ śuklapakṣe niviṣṭam |
nityānandaṃ paramam amṛtaṃ nirvikāraṃ sṛjantaṃ
vande tāpapraśamasuhṛdaṃ buddhapūrṇendubimbam || 73.16 ||

satva[5]smeraṃ sarasakaruṇākaumudīpūritāśaṃ
śāntyai kāntaṃ sakalatamasā śuklapa(kṣ)e niviṣṭaṃ |
nityānandaṃ paramam amṛtan nirvvikāraṃ sṛja[295b1]ntaṃ
vande tāpapraśamasuhṛdaṃ buddhapūrṇṇendubimbaṃ ||

| sa twa sme raṃ sa ra sa ka ru ṇā kau mu dī pū ri tā shaṃ
kā ntāṃ shā ntyai pa ka la ta ma sāṃ shu kla sa kṣhe ni bi staṃ |
| ni tyā na ndaṃ pa ra ma ma mri taṃ ni rbi kā raṃ sri dza ntaṃ
ba nde tā pa pra sha ma su hri daṃ [477b1] bu ddha pū rṇṇe ndu bi mbaṃ |

16b sakalatamasāṃ] DZ (Ed.); sakalatamasā AE. **16c** sṛjantam] AE (DE JONG), confirmed by Tib. *rnam par spro*; *mṛjantam Ex conj. Ed.; sṛjanti DZ.

| snying stobs kyis 'dzum ro ldan snying rje zla ba'i 'od kyis re ba skong |
| mdzes shing mtha' dag mun pa zhi slad dkar po'i phyogs la rnam par gnas |
| rtag tu kun dga' rnam 'gyur med cing mchog gi bdud rtsi rnam par spro |
| gdung ba rab zhi'i grogs po sangs rgyas zla nya'i gzugs la phyag 'tshal lo | 73.16 |

16a 'od kyis] DZ; 'od kyi PGN.

「諸々の善い性質ゆえに微笑を浮かべており (= 生来眩く輝き)[8]、柔和な憐れみの心という月光で願望という空間を満たし、あらゆる無知 (= 闇) を除くために潔白な者の側に与し (= 白月に〔天に〕留まり)、魅力あり、絶えず歓びを与え[9]、最高にして質を落とすことのない甘露を放ち[10]、〔輪廻生存の〕苦 (= 熱苦) を鎮める友である、仏陀という満月の環に帰命いたします[11]。」

cittaṃ sadā viṣayadoṣaparāṅmukhānām
yeṣāṃ vaśe pracurapāramitāśrayāṇām |

---

[8]sattvasmera° という用例は *Avadānakalpalatā* 第 25 章第 18 詩節にも現れる。これを smera が複合語末で„voll von"を意味するという PW の説明に従って解釈すれば「優れた性質に満ちた」と解釈できよう。しかし smera の語義派生 (Cf. Pāṇini 3.2.167: namikampismyajasakamahiṃsadīpaḥ raḥ) から考え「・・・で満ちた」という意味は派生しない。また PW の出典箇所に対する訳もこの解釈をとらない。例を見よう。*Harṣacarita* (『ハルシャ王の事績』) 17.7–8 の用例 agnihotrapavitrabhasmasmeralalātaiḥに対する英訳は "their foreheads gleamed with the pure ashes of the *Agnihotra* oblation"(COWELL and THOMAS [1897: 7], underline mine) である (テキストは FÜHLER ed., Bombay: Government Central Press, 1909 に従う)。また *Rājataraṃginī* (『王統流覧』) 第三章第 71 詩節の用例 vismayasmerair balaiḥに対する英訳は "with his troops smiling in astonishment" (STEIN [1900: 78], underline mine) である (テキスト・詩節番号は STEIN ed., Bombay, 1892 に従う)。「生来微笑みを浮かべる」、「生来眩く輝く」という意味に沿う解釈を考えるべきであろう。引田 [2005: 349] は「衆生に微笑みかけ」という訳をあてる。しかし smera が複合語の後分要素となる場合、前分要素が具格形以外をとる用例は管見の及ぶ限り見出されない。また前分要素は通常 (1) 白さを属性とする語 (mauktika, bhasman, kusuma)、(2) 精神状態を表示する語 (vismaya, smaraṇa) である。古典註に支持される (1)(2) 以外の用例を探すと、Bhavabhūti (八世紀) の戯曲 *Mālatīmādhava* (『マーラティーとマーダヴァ』) 第 10 幕第六詩節が該当する (テキストは GRIMAL ed., Pondichéry: Institut français de Pondichéry, 1999 及び BHANDARKAR ed., Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1905 に従う)。

[*Mālatīmādhava* 10.6]
akāraṇasmeramanoharānanaḥ śikhālalāṭārpitagaurasarṣapaḥ |
tavāṅkaśāyī parivṛttabhāgyayā mayā na dṛṣṭas tanayaḥ stanaṃdhayaḥ ||
理由もなく微笑を浮かべ、魅力的な顔をし、頭頂と額に白い芥子粒を付けて貰い、膝に横になって乳房を吸っている、爾の息子を命運が尽きた私は見ることがなかった。

当該詩節の akāraṇasmera° に対する Harihara 註と Jagaddhara 註を見ると、前者はこれを処格所有複合語として akāraṇam avijñātahetukaṃ smeraṃ smitam yatra tad akāraṇasmeram (341.5–6)「akāraṇasmera は〔処格所有複合語であり〕、そこ (= 顔) に理由のない、つまり理由が知られない微笑 (smeram = smitam) がある所のその〔顔と分析される〕」と説明する。後者は具格限定複合語として akāraṇenālakṣitahetutayā smeram īṣaddhasanaṃ (436.12)「理由なく、つまり理由を知られずに微笑する、つまり少し笑っている〔顔〕」と解釈する。この用例に照らし sattvasmeram は sattvaiḥ smeram という形に分析すべきであろう。この場合 sattvasmeraṃを buddha° に掛かる第一義としては「善き性質ゆえに微笑を浮かべている」、°pūrṇendubimbam に掛かる第二義としては「善き性質ゆえに生来眩く輝く」と解すのが穏当ではないか。対応する Tib. は snying stobs kyis 'dzum であり具格限定複合語に解す。

[9]nityam ānandaṃ yena「それ (= 仏陀という満月の環) のおかげで常に喜びがある〔仏陀という満月の環〕」という具格所有複合語に解す。

[10]nirvikāram「質を落とすことのない」は d 句の buddhapūrṇendubimbam「仏陀という満月の環」に掛かる形容句としても解釈できる。この解釈をとれば、nirvikāraṃは「仏陀」に掛かる場合「〔心が〕動揺することがない」、「満月の環」に掛かる場合「満ち欠けのない」となろう。この解釈については川村悠人氏の御教示に負う。

[11]当該詩節は Daṇḍin の *Kāvyādarśa* に対する Khams sprul Bstan 'dzin chos kyi nyi ma 四世 (1730–1779 C.E.) による注釈書 (139b4–5) に〈掛詞による隠喩〉の例として引用されている。この情報については根本裕史先生の御教示に負う。

te me paraṃ parahitābhiniveśabhājaḥ
saṃkalpakalpataravaḥ kuśalaṃ diśantu || 73.17 ||

cittaṃ sadāviṣayadoṣaparāṅmukhānāṃ
yeṣā(ṃ) vaśe pracurapāramitāśrayāṇāṃ
[2] te me paraṃparahitābhiniveśabhājaḥ
saṅkalpakalpataravaḥ kuśalaṃ ○ diśantu ||

| ci ttaṃ sa dā bi ṣha ya do ṣha pa rā ngmu khā nāṃ
ye yā ba she pra tsu ra pā ra mi tā shra yā ṇāṃ |
| te me pa raṃ pa ra hi tāṃ bhi ni be sha bhā dzaḥ
saṃ ka lpa ka lpa ta ra baḥ ku sha la ndi shaṃ tu |

17b pracura°] AEDZ (DE JONG), confirmed by Tib. *rab mang*; *parama° Ex conj. Ed.

| gang zhig rtag tu yul gyi skyon las phyi rol phyogs gyur cing |
| rab mang pha rol phyin la brten pa'i sems ni dbang gyur pa |
| gzhan phan dag la mchog tu mngon zhen rten cing kun rtog gi |
| dpag bsam ljon pa de dag bdag la dge ba ster gyur cig 73.17 |

17a las] DZ; la PGN. **17d** bsam] DZPN; bsams G. || dge ba] PGN; dge bar DZ.

「感官対象がもたらす罪業に振り向かず、おびただしい波羅蜜に依拠し[12]、常に心をとらえて止まない者というのは、望みのものをもたらす如意樹であり、他者をひたすら利益することに身を捧げる。そのような者が私に最高の幸福を御授けにならんことを。」

[10] 阿羅漢の集合

iti bhaktividhānena praṇidhānena bhūpateḥ |
sahasrāṇy arhatāṃ ṣaṣṭis tūrṇaṃ digbhyaḥ samāyayuḥ || 73.18 ||

iti bhaktividhānena praṇidhānena bhūpateḥ |
sahasrāṇy arhatāṃ ṣaṣṭis tūrṇṇan digbhyaḥ [3] samāyayuḥ ||

| i ti bha kti bi dhā ne na pra ṇi dhā ne na bhū pa teḥ |
| sa ha prā ṇya rha tāṃ ṣha ṣṭha stū rṇṇa di gbhyaḥ sa mā ya yuḥ |

18a bhakti°] ADZ (Ed.); bhikṣu° E.

| ces pa sa yi bdag po yi | | smon lam gus pa sgrub byed kyis |
| dgra bcom stong phrag drug cu ni | | phyogs rnams dag las myur bar byon | 73.18 |

18b sgrub] DZ; grub PGN (also correct). || kyis] DZ; kyi PGN.

信愛により立てられた[13]、以上のような王の誓願のおかげで、六万人の阿羅漢達が一瞬の間に諸方から集まって来た。

---

[12]校訂本は写本・チベット訳の読みを捨て、この箇所を paramapāramitāśrayāṇām「最高の波羅蜜を拠り所とする御方」と訂正する。しかし DE JONG が指摘するように、写本の読みをとるべきである。pracura°「おびただしい」が意味する所は「過去世で世尊が波羅蜜を繰り返し実践してきたこと」ではないか。

[13]vidhāna が複合語の後分要素となって所有複合語をなす場合、vidhāna は行為名詞として用いられ、その前分は当該行為の目的 (karman) を表示する属格形をとるのが普通である。しかしここでこの解釈をとると「信愛を実現する〔誓願〕」となり意味不明である。vidhāna の語義派生を考えると、理論上二つの解釈が考えられよう。

第一解釈
Pāṇini 3.3.117: karaṇādhikaraṇayoś ca に基づき vi-dhā に導入される kṛt 接辞 LyuṬを手段 (karaṇa) の意

[11] 龍王とアショーカの像の建立

athendro bhikṣur ākāraṃ haimaramyam akārayat |
sadṛśaṃ nṛpater ekaṃ nāgarājasya cāparam || 73.19 ||

athendro bhikṣur ākāra(ṃ) haimaramyam akārayat* |
sadṛśaṃ nṛ ○ pater ekaṃ nāgarājasya cāparaṃ ||

| a the ndro bhi kṣhu rā kā raṃ he maṃ ra mya ma kā ra ya t |
| sa dri shaṃ nri pa te re kaṃ nā ga rā dza sya pā pa raṃ |

19b haimaramyam] A; *haimaṃ ramyam Ex conj. Ed.; hemaramyam E; hemaṃ ramyam DZ. Tib. has *gser gyi rang bzhin* (*hemamayam).

| de nas dge slong dbang po yis | | gcig ni mi bdag mtshungs pa dang |
| gzhan pa klu yi rgyal po yi | | rnam pa gser gyi rang bzhin byas | 73.19 |

19b gcig] DZ; cig PGN.

次にインドラ比丘は黄金でできていて美しい、王に似せた姿を一体[14]、龍王に似せた姿をもう一体作らせた。

tataḥ kṣitipater mūrtir vinanāma śanaiḥ śanaiḥ |
unnanāma ca nāgendramūrtir vismayakāriṇī || 73.20 ||

tataḥ kṣitipater mūrttir vinanāma śanaiḥ śanaiḥ |
unnanāma ca nāge[4]ndramūrttir vismayakāriṇī ||

| ta taḥ kṣhi ti pa te rmmū rtti rni na nā ma sha naiḥ sha naiḥ |
| u nna nā ma tsa nā ge ndra mū rtti rbi smi ya kā ri ṇāṃ |

| de nas dal bu dal bu yis | | sa bdag gzugs ni dma' ba dang |
| klu yi dbang po'i gzugs dag ni | | ya mtshan byed pa mtho bar gyur | 73.20 |

20a yis] DZ; yi PGN. **20d** mtho] DZ; mthong PGN.

すると王の身体は非常にゆっくりと身を屈め、一方龍王の身体は驚くべきことに体を起こした。

yathā yathā nṛpaś cakre sadā ratnatrayārcanam |
tathā tathā nāgamūrtir vinanāmodyayau parā || 73.21 ||

味に解釈し、bhaktir vidhānaṃ yasya「それ (= 誓願) を実現する手段が信愛である〔誓願〕」という属格所有複合語に分析するもの。
第二解釈
Pāṇini 3.3.113: kṛtyalyuṭo bahulam に基づき kṛt 接辞 LyuṬを目的 (karman) の意味に解釈し、bhaktyā vidhānam「信愛を通じて実現されるもの〔である誓願〕」という具格限定複合語に分析するもの。

残念なことに vidhāna が「実現手段」、「実現されるもの」という意味で用いられる用例は稀である。前者については APTE が一箇所 *Rāmāyaṇa* 第三巻第 37 章第 36 詩節の用例を挙げており、Rāma 註はこれに vidhānair upakaraṇaiḥ「vidhāna とは『手段』のことである」という語釈を与える (巻章詩節番号は PAṆŚĪKAR ed., Bombay: NSP, 1930 に従う)。後者については用例を見出すことができなかった。第二解釈については川村悠人氏の御教示に負う。

[14]b 句冒頭部の校訂本の読みは haimaṃ ramyaṃである。これは梵文音写の hemaṃ ramyam という読みから校訂者が推定した読みと思われる。ところが写本 A を見ると haimaramyam とある。従って写本 A が示す読みを本来の読みと見るべきであろう。また Tib. の読みは gser gyi rang bzhin であり、元のテキストは *hemamayam「黄金からなる」という読みを伝えていた可能性がある。

yathā yathā nṛpaś cakre sadā ratnatrayārccanaṃ ○
tathā tathā nāgamūrttir vvinānāmodyayau parā ||

| ya thā ya thā nri pa shtsa kre sa dā ra tna tra yā tsa naṃ |
| ta thā ta thā nā ga mū rti rbi na nā mo dya yau pā rā |

21d parā] AE (DE JONG), confirmed by Tib. *gzhan pa*; *purā Ex conj. Ed.; pārā DZ.

| ji lta ji ltar mi bdag gis | | rtag tu dkon mchog gsum mchod byas |
| de lta de ltar klu yi gzugs | | dma' zhing gzhan pa mtho bar gyur | 73.21 |

21b mchog] DPGN; cog Z. **21d** mtho bar] DZ; mthong bar PGN.

王が三宝を絶えず敬えば敬う程、龍の身体は身を屈め、もう一体は起き上がった。

[12] 書翰の送付と龍の降伏

atha rājñā punar lekhe prahite nāgapuṃgavāḥ |
skandhārpitākhilavaṇigratnabhārāḥ samāyayuḥ || 73.22 ||

atha rājñā punar llekhe prahite nāgapuṅgavāḥ |
skandhā[5]rppitākhilavaṇigratnabhārāḥ samāyayuḥ ||

| a tha rā dznyāḥ pu na rla khe pra hi ta nā ga puṃ ga bā |
| ska ndhā rpi tā khi la ba ṇi gra tna bhā rāḥ sa mā ya yuḥ |

| de nas rgyal pos spring yig slar | | springs tshe klu yi gang zag rnams |
| ma lus tshong pa'i rin chen khur | | phrag la bkod nas 'ongs par gyur | 73.22 ||

さて王が再度手紙を送ると、龍の首領達は商人が所有する一群の宝珠を全て肩に載せてやって来た。

tad aśeṣaṃ narapatir vitīrya vaṇijāṃ dhanam |
visṛjya nāgān abhavaj jinaśāsanasādaraḥ || 73.23 ||

tad aśeṣaṃ narapatir vvitīryya vaṇijāṃ dhanaṃ |
visṛjya nāgān abhavataj jinasāsanasādaraḥ ||

| ta da she ṣhaṃ [478a1] na ra pa ti rbi tī rya ba ṇi dzā ndha naṃ |
| bi sri dzya nā gā na bha ba dzdzi na shā sa na sā da raḥ |

23c abhavaj] EDZ (Ed.); abhavataj A (unmetrical).

| ma lus nor de mi bdag gis | | tshong pa rnams la rab tu byin |
| klu rnams btang nas rgyal ba yi | | bstan la gus dang bcas par gyur | 73.23 |

23a de] DZPN; ni G.

王はその富を残らず商人達に分け与え、龍達を送り出し、勝者の教えに専ら心を向ける者となった。

[13] 阿羅漢供養

sa vidhāyārhatāṃ pūjām upacārair nṛpocitaiḥ |
babhūvānalpasaṃkalpair buddhasaṃdarśanotsukaḥ || 73.24 ||

sa vidhāyārhatām pūjām uparcārair nṛpocitaiḥ |
[296a1] (babhūv)ānalpasa(ṃ)kalpai(r) buddhasandarśanotsukaḥ ||

| su bi dhā ryā rha tāṃ pū dzā mu pa tsā rai nri po tsi taiḥ |
| ba bhū bā na lpa saṃ ka lpa rbu ddha sa nda rṣha no tsu kaḥ |

| mi bdag la 'os nyer spyad kyis | | dgra bcom rnams la mchod pa bsgrubs |
| kun tu rtog pa mi chung bas | | sangs rgyas lta bar 'dod par gyur | 73.24 |

24d lta bar] PGN; blta bar DZ.

彼は王にふさわしい諸々の身の回りの品々を用いて阿羅漢達を供養し、強く思い慕うがゆえに[15]、仏陀に見えたくなりいても立ってもいられなくなった。

[14] ウパグプタの招聘

durlabhe parinirvāṇanilīnajinadarśane |
upaguptaṃ sa śuśrāva sugatapratimaṃ guṇaiḥ || 73.25 ||

durllabhe parinirvvāṇanilīnaṇḍajinadarśane |
upaguptaṃ sa śuśrāva sugatapratimaṃ guṇaiḥ ||

| du rla bhe pa ri ni rbā ṇa ni lī na dzi na da rsha ne |
| u pa gu pta pa shu shrā ba su ga ta pra ti maṃ gu ṇaiḥ |

25b °nilīna°] EDZ (Ed.); °nilīnaṇḍa° A (unmetrical).

| yongs su mya ngan 'das gyur pas | | rgyal ba mthong ba rnyed dka'i tshe |
| yon tan gyis ni nyer sbas dang | | bde gshegs mtshungs par de yis thos | 73.25 |

---

[15]analpasaṃkalpair が複数形をとっている点、具格がどのような意味で用いられているかについて疑問が残る。これについては Kālidāsa の叙情詩 *Meghadūta*（『雲の使者』）第 99 詩節に対する Vallabhadeva 註が参考になる（テキストは HULTZSCH ed., London: Royal Asiatic Society, 1911 に従う）。

[*Meghadūta* 99]
aṅgenāṅgaṃ tanu ca tanunā gāḍhataptena taptaṃ sāsreṇāsradravam aviratotkaṇṭham utkaṇṭhitena |
uṣṇocchvāsaṃ samadhikatarocchvāsinā dūravartī saṃkalpais te viśati vidhinā vairiṇā ruddhamārgaḥ ||
君の〔夫は〕逆境に道を阻まれ遠方にいる。〔彼は〕窶れ、極度に苦しめられ、涙を浮かべ、思慕の念を露にし、大きく溜息をついてばかりいる体で、とても窶れ、苦しめられ、涙に濡れ、思慕とめどなく、熱い溜息をつく、君の体の中に、君を思慕するがゆえに入って行く。(tanu ca の解釈については横地 [2008: 104, fn. 6] を参照せよ)

詩節 d 句の saṃkalpais を含む箇所を Vallabhadeva は次のように解釈する。

[Vallabhadeva on *Meghadūta* 99 (52.9–10)]
tava preyān *dūravartī saṃkalpair* utkaṇṭhāvaśād *aṅgenāṅgaṃ viśati* vapuṣā tvaddehaṃ praveṣṭum icchati | tvayaikyaṃ yiyāsatīty arthaḥ |
君の夫は遠方にいて、君を思慕するがゆえに (saṃkalpair = utkaṇṭhāvaśāt) 体で体の中に入って行く。〔彼は〕身体で君の体に入って行くことを望んでいる。君と一つになりたいという意味である。

saṃkalpa が複数形をとっている理由を Vallabhadeva は説明しない。しかし saṃkalpair を「思慕行為」、具格を理由の意味に解釈していることが指摘できよう。複数形をとっている理由は横地 [2008: 104–105] の解釈を踏まえると、ヤクシャが妻に恋い焦がれる気持ちが沢山あることによるものと考えられる。以上を念頭に置くと、問題の詩節の analpasaṃkalpair が意味するのは「繰り返し何度も思い慕うがゆえに」ということではないか。

完全な涅槃に入っているので消滅している勝者を見ることは難しいけれども、諸々の美質の点で善逝に等しいウパグプタがいるということを彼 (= アショーカ王) は聞いた。

vidheyaṃ bhaktiyuktānāṃ nṛpaḥ praṇayivatsalaḥ |
urumuṇḍasthitaṃ dūtair ānināya tam ādarāt || 73.26 ||

vidheyaṃ bhaktyuktānāṃ nṛpaḥ praṇayivatsalaḥ [2]
(ur)umuṇḍasthira(ṃ dūtai)r ānināya tam ādarāt* ||

| bi dhe yaṃ bha kti yu ktā nāṃ nri paḥ pra ṇa yi ba tsa laṃ |
| u ru ṃu ṇḍa sthi taṃ dhū tai ra ni nā ya ta mā da rā t |

26a vidheyaṃ] ADZ (Ed.); vidheya E. **26c** urumuṇḍasthitaṃ DZ (Ed.); urumuṇḍasthiraṃ A; urumaṇḍasthiraṃ E.

| gus dang ldan pa'i dbang gyur cing | | mdza' la mnyes gshin 'gro tshe na |
| gnas pa de ni mi bdag gis | | gus pas pho nya dag gis bos | 73.26 |

26b 'gro] DZ; 'go PGN.

王は情け深く、柔和な心をしていたので、信愛を抱く者達の意にかなった、ウルムンダ山にいる彼 (= ウパグプタ) を、使者を遣わして[16]、尊敬の気持ちから招いた。

[15] アショーカの三宝敬礼

tatsaparyāptaparyāptasaddharmakuśalodayaḥ |
babhūva satataṃ rājā ratnatrayaparāyaṇaḥ || 73.27 ||

tatsaparyāptapary(āpta)sa ○ ddharmmakuśalodayaḥ |
babhūva satataṃ rājā ratnatrayaparāyaṇaḥ ||

| ta tpa pa ryā pta ga rthā pta sa ddha rmma ku sha lo da yaḥ |
| ba bhū ba sa ta taṃ rā dzā ra tna tra ya pa rā ya ṇaḥ |

27a °saparyāptaparyāpta°] A (DE JONG), comfirmed by Tib. *yongs rdzogs ... mchod pas thob*; *°saparyāptaparyanta° Ex conj. Ed.; °saparyāptaparyata° E; °saparyāptagarthāpta° DZ.

| dam chos dge ba rgyas pa ni | | yongs rdzogs de yi mchod pas thob |
| rtag tu dkon mchog gsum po ni | | rgyal po'i dpung gnyen dag tu gyur | 73.27 |

27b yi] ZPGN; yis D. || mchod pas] DZ; mchod pa PGN. **27c** mchog] DPGN; cog Z.

彼 (= ウパグプタ) を供養することを通じて、正しい法がもたらす幸福を完全に成就させ[17]、王は三宝を絶えず身の寄せ場とするようになった。

---

[16]「ウルムンダ山」(urumuṇḍa) に対する Tib. が mgo chen ではなく、'gro tshe となっているのは語源的に奇妙である。また梵文写本 A はこの箇所を urumuṇḍasthiraṃ と筆写する。しかし名称語以外で sthira が処格限定複合語の後分要素となる用例は管見の及ぶ限り見られない。校訂本がとる梵文音写の読み urumuṇḍasthitaṃ をとるべきであろう。

[17]ab 句の校訂本の読みには問題がある。また解釈が難しい。校訂本は a 句冒頭を tatsaparyāptaparyanta° とする。DE JONG は最古の写本 A に基づいてこれを tatsaparyāptaparyāpta° と修正するよう提案する。°paryāpta° にあたる部分が写本 A では判読し難いが、写本 E は °paryāpta° と筆写している。この読みは Tib. からも支持される上、Kṣemendra が sa**paryāptaparyā**pta° という〈同音群反復〉を意図していたと考えれば問題なかろう。またこの〈同音群反復〉は *Rāmāyaṇamañjarī* (『ラーマの事績の花束』) の奥書第五詩節目に vidvajjanasa**paryāptaparyāpta**svajanotsavaḥ「〔Kṣemendra は〕知者を供養することを通じて、親族を十二分に歓喜させた」という形で見出される (テキストは ŚIVADATTA and PARABA eds., Bombay: NSP, 1903 に従う)。DE JONG の訂正案をとるべきであろう。

iti jinasmaraṇena mahīpatiḥ prasṛtapuṇyamahodayasampadā |
viṣabhṛtām api mauliṣu śāsanam kusumadāmavilāsam avāptavān || 73.28 ||

iti jinasmaraṇena mahīpati[3]ḥ p(r)asṛ(ta)puṇyamahodayasampadaḥ |
viṣabhṛtām api mauliṣu śāśanaṃ ○ kusumādāmavilāsam avāptavān* ||

| i ti dzi na sma ra ṇe na ma hī pa tiḥ pra pa ba pu ṇya ma ho da ya sa mpa daḥ |
| bi ṣha bhri tā ma pi mau li ṣhu shā sa naṃ ku su ma dā ma bi lā sa ma bā pta ba n |

28b prasṛtapuṇyamahodayasampadā] Ex conj. Tib. *rab rgyas bsod nams cher bar dar ba phun tshogs kyis* (DE JONG); *prasabhapuṇyamahodayasampadā Ex conj. Ed.; prasṛtapuṇyamahodayasampadaḥ A; prasavapuṇyamahodayasampadaḥ E; prapabapuṇyamahodayasampadaḥ DZ.

| de ltar rgyal ba dran pas sa yi bdag po dag
| rab rgyas bsod nams che bar dar ba phun tshogs kyis |
| bka' ni me tog 'phreng bar gyur pa'i rtse dga' dag
| dug 'dzin rnams kyi mgo bo la yang thob par gyur | 73.28 |

28b kyis] DZ; kyi PGN. **28c** 'phreng bar] DZ; phreng bar PGN (also correct).

以上のような勝者を念ずる行いは、広く聞こえている徳ある行いがもたらす大きな〔果の〕生起を実現させる[18]。それを通じて大地の主は毒を宿す者達の頭頂に対してすら命令を下すという花環との戯れを手にしたのである。

次に解釈の問題であるが、°paryāpta°「完全な」が後続する複合語 °saddharmakuśalodayaḥ「正しい法がもたらす幸福の成就」のどの構成要素を限定しているのか判断し難い。Tib. を見ると dam chos dge ba rgyas pa ni yongs rdzogs「正しい法がもたらす幸福の、完全なる成就」という解釈をとっていることが分かる。蔵訳者は paryāptaś cāsau saddharmakuśalodayaś ca という同格複合語の分析文を念頭に置いていたと思われる。従って °paryāpta° を °udayaḥの限定要素と見なす解釈をとる。

[18]梵文写本も梵文音写もこの箇所のテキストを正しく伝えない。解釈も困難である。順に問題を検討しよう。まず梵文写本と梵文音写はいずれも b 句末で °sampadaḥという読みを伝える。しかしこれでは b 句が詩節内で浮いてしまう。対応する Tib. phun tshogs kyis に基づいてこれを °sampadā と訂正する校訂本の読みをとるべきであろう。ところが校訂本は b 句冒頭を prasabha° と読んでおり意味が通じない。梵文写本 A の読みは判読し難いが DE JONG が言うように prasṛta° と筆写されているように見える。若い写本と梵文音写はそれぞれ prasava° もしくは prapaba° と筆写しており、筆写者が該当部分を判読し得なかった可能性がある。Tib. は rab rgyas「とても広大な」という大雑把な訳語をあてるので "cf.(scil. confirmed) by Tib." という DE JONG の言は論拠が弱いように思われるが、彼の訂正案を反論する根拠が十分に見出されない以上、この読みをとるべきであろう。

解釈の問題に移ろう。prasṛta° と °udaya° の意味が分かりにくい。prasṛta が複合語の前分要素となる場合、「光」や「血液」、「矢」、「手」といった物質名詞を後分要素にとり「流れ出た」、「放たれた」、「差し出された」という意味を表示して所有複合語をなすのが普通である。しかしこの文脈で所有複合語の解釈をとるのは難しいであろう。問題箇所では「広く聞こえている」、「有名な」、「周知の」といった意味で用いられているのではないか。これにやや近い用例は *Varṇārhavarṇa* 第七章第 12 詩節に見られる。

[*Varṇārhavarṇa* 7.12]
brāhmaṇā brahmaṇaḥ putrā aurasā mukhajā iti |
prasṛto lokavādo 'yaṃ tvayi sāphalyam āgataḥ ||
「およそバラモンという者は梵天の息子であり、胸から生まれたのであり、口から生まれたのだ。」という、世間一般で広く言われているこのことは、爾に関して現実のものとなったのだ。

註釈を欠く点に問題があるが (HARTMANN [1987: 224] は„weitverbreitete"という訳を与える)、prasṛtapuṇya を prasṛtaṃ ca tat puṇyaṃ ca「広く聞こえている/有名な徳ある行い」という同格限定複合語に解す。

udaya の解釈については Bhavabhūti の *Mahāvīracarita* (『偉大なる勇者の事績』) 第四幕第 12 詩節とそれに対する Vīrarāghava の注釈が参考になる。

[*Mahāvīracarita* 4.12]
aprākṛtāni ca guṇaiś ca nirantarāṇi lokottarāṇi ca phalaiś ca mahodayāni |
vīrasya tasya mahataś caritādbhutāni nāsmākam eva jagatām api maṅgalāni ||
非凡にして、諸々の美点に満ち、世間を越えていて、もたらす諸々の果で大きな〔果を〕生ぜしめる、かの偉大な勇者 (= ラーマ) がなした諸々の事績という驚きの的は、ただ我々のみならず、世界に吉祥をもたらすものなのだ。

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisattvāvadānakalpalatāyāṃ nāgadūtapreṣaṇāvadānaṃ nāma trisaptatitamaḥ pallavaḥ ||

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisatvāvadānakalpalatā[4]yā(ṃ) nāgadūtapreṣaṇāvadānaṃ trisaptatitamaḥ pallavaḥ || 7 × ||

| i ti kṣhe me ndra bi ra tsi tā yāṃ bo dhi sa twā ba dā na ka lpa [478b1] la tā yāṃ nā ga dū ta pre ṣha ṇā ba dā naṃ tri sa pta ti ta maḥ pa lla waḥ ||

| ces pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi 'khri shing las klu la spring yig springs pa'i rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste bdun cu rtsa gsum pa'o |

Colophon ces pa] ZPGN; zhes pa D. || spring yig springs pa'i] PGN; springs pa'i DZ.

以上 Kṣemendra によって著された『菩薩のアヴァダーナの願望成就の蔓草』中の「龍への使者の派遣アヴァダーナ」という名の第 73 章了。

付論 II　*Avadānakalpalatā* 第 59 章 Kuṇāla 和訳研究に対する補足

同章に対する和訳研究は本誌第 8 号に発表した通りであるが、内容上補足すべき点が新たに見出されたので、以下に当該の梵文テキストと新訳、訳注を挙げておく。略号及び所引の文献は特に断りがない限り、前掲論文で用いたものに同じである。

第二詩節

purottame pāṭaliputranāmni mahīyuvatyās tilakāyamāne |
yaśonidhiḥ *sauryakulāvataṃsaḥ śrīmān aśokaḥ kṣitipo babhūva || 59.2 ||

大地という娘の額印のような働きをする、パータリプトラという名の最上の都城に、名声の宝庫であり日種の頭飾りである吉祥なるアショーカという大地の守護者が現れた。

PW が用例とともに挙げる avataṃsa の語義は「花環」(Kranz)、「環状の飾り」(reifenförmiger Schmuck) の二つである。しかし kośa 類にその痕跡が見られる通り、この語は後には「耳飾り」(Ohrenschmuck)、「頭髪に巻く環飾り」(auf dem Scheitel getragener Kranz) の意味で用いられ、隠喩的に「最も優れたもの」を表すようになったようである。これを裏付ける証拠を我々は Ratnākara の *Haravijaya* 第 31 章第八詩節に対する Alaka 註、Śrīharṣa の *Naiṣadhīyacarita* に対する Nārāyaṇa 註に見出す。

[*Haravijaya* 31.8]
sa preṅkhitaśravaṇatālasamīravegaparyastakāñcanalatāspadaratnapuṣpe |
saṃdānitaṃ mahati kalpatarāv apaśyad airāvaṇaṃ sakalanāgakulāvataṃsam ||

黄金の蔓草を付く場所とする宝珠の花が、揺さぶられる垂れ耳で起こる風の力で散乱する巨大な如意樹に結び付けられた、全ての象の一族の頭飾りであるアイラーヴァナ象を彼は見た。

d 句末の avataṃsa に対し Alaka は avataṃsaḥ śirobhūṣaṇam (「avataṃsa とは頭の飾りのことである」) という語釈を与える。*Naiṣadhīyacarita* の用例は次の通りである。

[*Naiṣadhīyacarita* 3.94]
tvayā vidheyā na giro madarthāḥ krudhā kadusṇe hṛdi naiṣadhasya |
pittena dūne rasane sitāpi tiktāyate haṃsakulāvataṃsa ||

下線部に対し Vīrarāghava は phalaiś ca mahodayāni mahāphalajanakāni (230.25)「諸々の果で大きな生起をもたらす、つまり大きな果を生ぜしめる」(テキストは GRIMAL ed., Pondichéry: Institut Français, 1989 のそれに従う) という説明を与える。これを踏まえると問題の udaya は「〔徳ある行いがもたらす大きな〕果の生起」と解すことができよう。問題箇所は prasṛtapuṇyamahodayasya sampad yasya tena「広く知られた徳ある行いがもたらす大きな〔果の〕生起を実現させる〔勝者の想起行為〕」と分析できるのではないか。

ハンサ鳥の一族の飾りよ、憤りのせいでニシャダ王の息子の心が少しでも険しくなっている時、私の為の言葉をお前は発してはなりません。胆汁素のせいで味覚が損なわれている時、白糖すら苦いもののように作用するのだから。

Nārāyaṇa は d 句の haṃsakulāvataṃsa を haṃsavaṃśabhūṣaṇa (142.27) と言い換えているので avataṃsa を「飾り一般」の意味に解していたことが推定されよう。以上の語釈を根拠にここでは avataṃsa を「頭飾り」、「飾り」の意味に解すべきであろう。

第 23 詩節

aklībacandradyutim āyatākṣaṃ pīnāṃśam ājānuvilambibāhum |
abhyetya taṃ sneharasārdracittā yavīyasī sā jananī jagāda || 59.23 ||

満月のような輝きを発し、目は大きく、肩は肉付きがよく、腕は膝まで垂れ下がっている彼に近づいて、愛という情 (或いは、愛情と色欲) のこもった心を抱いた、そのずいぶんと若い母親は言った。

b 句末を梵文写本 B と梵文音写はājānuvilambabāhum と読み校訂本はこれをとる。これに対し梵文写本 A と E が示す読みはājānuvilambibāhum である。意味する所は同じであるが、梵文写本 A の読みを優先させる方針に照らしājānuvilambibāhum という読みをとるべきであろう。この読みは *Raghuvaṃśa* 第 18 章第 25 詩節における次の用例からも支持される。引用テキストは PANDIT ed., Bombay: Indu-Prakash Press, 1874 に基づく。

[*Raghuvaṃśa* 18.25]
pitā pitṛṇām anṛṇas tam ante vayasy anantāni sukhāni lipsuḥ |
rājānam ājānuvilambibāhuṃ kṛtvā kṛtī valkalavān babhūva ||

祖先達からの負債がなくなり義務を全うした父親は、最後の人生の段階で終わりのない諸々の楽を手にしようとして、腕が膝まで垂れ下がっている彼を王となし、木の皮を身にまとった。

c 句末の sneharasārdracittā は多様な解釈の余地を残す。これについては Kālidāsa の *Kumārasambhava* 第三章第 35 詩節に対する註釈家 Vallabhadeva (10 世紀) と Mallinātha (14 世紀) の註釈が参考になる。当該詩節は次の通りである。

[*Kumārasambhava* 3.35]
taṃ deśam āropitapuṣpacāpe ratidvitīye madane prapanne |
kāṣṭhāgatasneharasānuviddhaṃ dvaṃdvāni bhāvaṃ kriyayā vivavruḥ ||

カーマが花の弓に弦を張り、ラティを従えてその場所 (= シヴァの精舎) に辿り着いた時、雌雄のつがいは、最高潮に達した愛という情と混じり合った感情を仕草で露にしていた。

c 句を Vallabhadeva は次のように解釈する。Vallabhadeva on *Kumārasambhava* 3.35 (77.3–4): *kāṣṭhāṃ* parāṃ koṭiṃ *gataḥ* prāpto yaḥ *snehaḥ* prītiḥ *rasaś* ca rāgas tābhyām *anuviddhaṃ* bhāvitam | ratirāgagarbham ity arthaḥ (「最高潮に (kāṣṭhām = parāṃ koṭim) 達した (gataḥ = prāptaḥ)愛 (snehaḥ = prītiḥ) と色欲 (rasaḥ = rāgaḥ) とでもたらされた (anuviddham = bhāvitam)〔感情〕、つまり愛と色欲とを含んだ〔感情〕という意味である。」)。つまり sneha を「愛」、rasa を「色欲」の意味に解し両者を並列複合語に解釈する。これに対し Mallinātha は次のような語釈を与える。Mallinātha on *Kumārasambhava* 3.35 (51.25–28): *kāṣṭo*tkarṣaḥ | *kāṣṭo*tkarṣe sthitau diśi ity amaraḥ | tāṃ *gato* yaḥ *sneha* iṣṭasādhananibandhanaḥ premāparanāmā mamatābhimānaḥ | premā nā priyatā hārdaṃ prema snehaḥ ity amaraḥ | sa eva *rasas* tenānuviddhaṃ saṃpṛktaṃ *bhāvaṃ* ratyākhyaṃ śṛṅgārabhāvaṃ (「kāṣṭhā とは卓越性のことである。『kāṣṭhā は卓越性、境界、方角を意味する』と *Amarakośa* は言う。そこ (= 最高潮) に達した愛—望みのものを手に入れる行為と結び付く、『愛情』とも呼ばれる、『私のものだ』という思い込みであり、『男性形の preman、priyatā、hārda、preman、sneha は愛情を意味する同意語である』と *Amarakośa* は言う—という情でいっぱいになった、つまり混ざり合った感情、つまり『恋』と呼ばれる『恋情』を生み出す感情。」) (テキストは PANŚĪKAR ed., Bombay: NSP, 1906 に基づく)。すなわち sneha についての解釈を Vallabhadeva と同じくするものの、rasa を演劇論上の〈情〉の意味に解し、両者を同格限定複合語に解釈する。rasa を rāga「色欲」と同義と見なす解釈は Ratnākara の *Haravijaya* 第 23 章第 50 詩節に対する Alaka 註にも現れるので、10 世紀以降のカシミールでは rasa を rāga と区別せずに用いていた可能性もある。二つの解釈を併記しておく。

第 26 詩節

parāpy asau me jananī nijeva vātsalyam āviṣkurute sadaiva |
dhyātveti niḥśaṅkamatiḥ sa tasyāḥ pādapraṇāmānataśekharo 'bhūt || 59.26 ||

「〔実母〕でもないのに、その御方は私の実母のように本当にいつも愛情を示して下さっている。」と考え、彼は疑念を抱くことなく、彼女の足にひざまずいて頭を下げた。

°ānataśekharo を文字通り解釈すれば「宝冠を曲げた」となろう。しかし意味不明である。この場合「頭を下げた」という意味が期待されるべきである。では実際にこの意味で用いられている用例があるか否かが問題となる。この類例として natamauli という表現がŚrīharṣa の *Naiṣadhīyacarita* 第九章第 157 詩節にある。

[*Naiṣadhīyacarita* 9.157]
atha bhīmabhuvaiva raho'bhihitāṃ natamaulir apatrapayā sa nijām |
amaraiḥ saha rājasamājagatiṃ jagatīpatir abhyupagatya yayau ||

さてかの大地の主 (= ナラ) は、まさしくビーマ王の娘 (= ダマヤンティー) から密かに告げられたように、諸王が集まる場所へ神々と一緒に自分が行くことに同意してから、恥ずかしさでうつむきながら発って行った。

下線部に対し Nārāyaṇa 註は adhomukhaḥ「顔を下に向けた」という語釈を与える (Nārāyaṇa on *Naiṣadhīyacarita* 9.157 [406.18])。この語釈に照らすとānataśekhara という表現は「宝冠を曲げた」という意味ではなく、「宝冠を傾けた」つまり「頭を下げた」、「うつむいた」という意味で用いられていたことが推定されよう。従って我々は問題箇所を「頭を下げた」という意味に解すべきではないか。

第 63 詩節

atrāntare putramukhāravindasaṃdarśanotkaṇṭhitamānasasya |
cintānubandhād iva bhūmibhartur vyādhir babhūvodarabaddhamūlaḥ || 59.63 ||

この間、心が息子の蓮華のような顔を見ることを切望する〔アショーカ〕王に、内臓に深く根を生やした病が、絶えざる心配に起因しているかのように生じた。

校訂本は d 句を vyādhir babhūvodarabaddhamūtraḥ「内臓で尿の排泄が阻まれる病が生じた」と復元する。確かに °baddhamūtra が医学文献で「排尿を妨げる」(den Harn hemmend) という意味で用いられる用例は存在する。しかしこの文脈ではあり得ない読みである。まずネパール系写本と梵文音写、Tib. は全て脚末の °mūtraḥという読みを支持しない。三者が示す読みは °mūlaḥである。次に用例の有無が問題となるが、DE JONG [1965a: 234] が指摘するように、PW は baddhamūla に「深く根ざした」(Wurzeln gefasst habend, fest wurzend) という訳をあて*Śiśupālavadha* 第二章第 38 詩節を典拠として挙げている。但し PW の解釈を無条件にとるのは危険なので、当該箇所を註釈家 Vallabhadeva の説明とともに見てみよう。Mallinātha 註は baddhamūla に対する語釈を欠くので省略する。

[*Śiśupālavadha* 2.38]
tvayā viprakṛtaś caidyo rukmiṇīṃ haratā hare |
baddhamūlasya mūlaṃ hi mahad vairataroḥ striyaḥ ||

ヴィシュヌよ、爾はルクミニーを奪い、チェーディ国王の気分を損ねている。実に女というものは、根ざす所を得た敵意という木の主たる根である。(vairataroḥを Mallinātha 註に従い〈隠喩〉に解す。Vallabhadeva 註は「木のような敵意」という〈直喩〉(upamā) に解す)

下線部に対し Vallabhadeva は次のような語釈を与える。Vallabhadeva on *Śiśupālavadha* 2.38 (58.7–8): *baddha*mūlasya kāraṇāntareṇa labdhapratiṣṭhasya *vairataroḥ striyo mahan mūlaṃ* pradhānaṃ kāraṇam iti tv anye | (「一方、女というものは、別の原因を理由として、根ざす所を得た (baddhamūlasya = labdhapratiṣṭhasya) 木のような敵意の大きな根源すなわち主たる要因だと、別の者達は〔言う〕。」)。以上の直接証拠と状況証拠に照らし我々は DE JONG [1965a] の指摘を妥当と見なしそれに従うべきである。

第 145 詩節

sa labdhasaṃjñaḥ śanakair jalena himacchaṭāśīkaradantureṇa |
samīpam āptaṃ nṛpatiḥ kumāram utsaṅgam āropya ciraṃ śuśoca || 59.145 ||

かの〔アショーカ〕王は雪の塊から滴る雫で眩い水を掛けられてようやく意識を取り戻し、近くにやって来た太子を膝に乗せ、長い間悲嘆に暮れた。

b 句の解釈が難しい。Tib. はこれを kha ba'i zer ma'i thigs 'dra chus「雪の塊の滴に似た水」と意訳する。*Aśokāvadānamālā* の編者もこの箇所を理解できなかったらしく °chaṭāśīkharasaurasena (*Aśokāvadānamālā* 5.247) という形にテキストを変えている。DE JONG はこれに従い *°chaṭāśīkharasaurabhena「〔雪〕塊から生じる細かい水滴から芳しい香りを放つ〔水〕」と修正すべきであろうかと推定する。しかし °dantureṇa を °saurabhena と修正すると写本の読みから離れてしまう。写本の読みをとるべきであろう。ではどう解釈するか。確かに pw が挙げる dantura の意味は (1)「歯が突き出ている」(hervorstehende Zähne habend)、(2)「起伏のある」(uneben)、(3)「びっしりと覆われている」(dicht besetzt mit)、(4)「醜い」(häßlich) であり、いずれもこの文脈に合わない。当該箇所に最も近い用例を探すと *Haravijaya* 第四章第二詩節の用例が挙がる。

[*Haravijaya* 4.2]
abhyāhatāhimakaraḥ sphuradacchatārāprastāratārakiraṇotkaradanturaśrīḥ |
mūlena yasya mathitaḥ sakalo 'mburāśir atyunnatena śikhareṇa ca nākamārgaḥ ||

それ (= マンダラ山) の裾野と高く突き出た峰とはそれぞれ、蛇と海獣を叩きのめし、きらめいていて透き通った、星々のように散らばる真珠玉が放つ一群の光線で眩い美しさをした大海全体と、太陽を凌駕し、きらめいていて透き通った星座が放つ、輝く一群の光線で (或いは、星座と月の、現れ出る光線で)眩い美しさをした空の領域とを撹拌した。

以上の詩節に対し Alaka 註は次の語釈を与える。*ahayo makarāś* ca prāṇibhedāḥ | *ahimakaraś* ca sūryaḥ | *tārāvat prastāro* yeṣāṃ te *tārā* muktāmaṇayaḥ | tatkaranikareṇa | *tārāprastārasya* ca *tareṇa* dīptamatā *kiraṇotkareṇa danturā* hasantī saṃunnatā vā | *tārakiraṇaḥ* sītāṃśuḥ tasya codgatair aṃśubhir iti vā *nāka*pakṣe yojyam ||（「蛇 (ahi) 達と海獣 (makara) 達とは生物の一種である。熱い光線を発するもの (ahimakara) とは太陽のことである。星々のように散らばる真珠玉 (tārāḥ = muktāmaṇayaḥ)。それが放つ一群の光線で〔眩い美しさをした大海全体〕。そして星座 (tārāprastāra) の、輝く (tareṇa = dīptamatā) 一群の光線で眩い、つまり白く輝くもしくは気高い〔美しさをした空の領域〕。或いは tārakiraṇa とは冷たい光を放つもの (= 月) のことであり、そしてそれ (= 月) の現れ出た光線で (utkareṇa = udgatair aṃśubhiḥ)〔眩い美しさをした空の領域〕というように空の側と構文上結び付けられうる。」)

以上の用例は本来の dantura が持つ「歯が突き出ている」という語源的な意味が、Ratnākara の時代には「白い」、「気品ある」という二次的な意味に使われていたことを示唆する。*Avadānakalpalatā* の問題の詩節における dantura の用例は himacchaṭā「雪の塊」という語と一緒に用いられていることから考えて、この意味で解釈するのが穏当ではないか。

略号及び参考文献

BHSD = EDGERTON, Franklin 1953 *Buddhist Hybrid Grammar and Dictionary*. vol. 2: Dictionary. New Haven: Yale University Press. (Reprint: Delhi: Motilal Banarsidass, 1972)

pw = BÖHTLINGK, Otto 1879–1889 *Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung*. 7 vols., St. Petersburg: Buchdruckerei der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. (Nachdruck: Kyoto: Rinsen Book Co., 1991)

PW = BÖHTLINGK, Otto and Rudolf ROTH 1855–1875 *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 vols., St. Petersburg: Buchdruckerei der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. (Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai, 1976)

SCHMIDT, Nachtr = SCHMIDT, Richard 1928 *Nachträge zum Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung von Otto Böhtlingk*. Leipzig: Verlag von Otto Harrassowitz. (Nachdruck: Kyoto: Rinsen Book Co., 1991)

CAPPELLER, Carl 1912 *Bhāravi's Poem Kirātārjunīya: Or Arjuna's Combat with the Kirāta* (=HOS vol. 15). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

COWELL, Edward Byles and Frederick William THOMAS 1897 *The Harṣa-carita of Bāṇa*. London: Royal Asiatic Society. (Reprint: Delhi: Motilal Banarsidass, 1968)

DIETZ, Siglinde 1984 *Die buddhistische Briefliteratur Indiens: Nach dem tibetischen Tanjur herausgegeben, übersetzt und erläutert* (= Asiatische Forschungen Bd. 84). Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

DIMITROV, Dragomir 2002 *Mārgavibhāga Die Unterscheidung der Stirarten: Kritische Ausgabe des ersten Kapitels von Daṇḍins Poetik Kāvyādarśa und der tibetischen Übertragung Sñan ṅag me loṅ nebst einer deutschen Übersetzung des Sanskrittextes* (= IndTib Bd. 40). Marburg: IndTib Verlag.

GEROW, Edwin 1971 *A Glossary of Indian Figures of Speech*. The Hague·Paris: Mouton.

HAHN, Michael 2007 *Haribhaṭṭa in Nepal: Ten Legends from His Jātakamālā and Anonymous Śākyasiṃhajātaka* (= StPhB Monograph Series XXII). Tokyo IIBS.

HARTMANN, Jens-Uwe 1987 *Das Varṇārhavarṇastotra des Mātṛceṭa* (=AAWG Philologisch-historische Klasse Dritte Folge #160). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

MANI, Vettam 1975 *Purāṇic Encyclopedia: A Comprehensive Dictionary with Special Reference to the Epic and Purāṇic Literature*. Delhi: Motilal Banarsidass.

LIENHARD, Siegfried 1984 *A History of Classical Poetry: Sanskrit–Pali–Prakrit* (= HIL vol. 3 fasc. 1). Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

QUACKENBOS, George Payn 1917 *The Sanskrit Poems of Mayūra: Edited with a Translation and Notes and an Introduction together with the Text and Translation of Bāṇa's Caṇḍīśataka* (= Columbia University Indo-Iranian Series vol. 9). New York: Columbia University Press. (Reprint: New York: AMS Press, 1965).

SHACKLETON BAILEY, David Roy 1951 *The Śatapañcāśatka of Mātṛceṭa: Sanskrit Text, Tibetan Translation and Commentary and Chinese Translation*. Cambridge: The University Press.

STEIN, Mark Aurel 1900 *Kalhaṇa's Rājataraṅgiṇī: A Chronicle of the Kings of Kaśmīr*. 2 vols., London: A. Constable. (Reprint: Delhi: Motital Banarsidass, 2009)

STRAUBE, Martin 2011 "„Der Kampf des Kiraten mit Arjuna" Zu einer kaum bekannten Übersetzung des *Kirātārjunīya* durch Friedrich Rückert," *ZDMG* 161-2, pp. 377–404.

岡野 潔 2005 「Avadānakalpalatā から avadānamālā 類へ」(『印仏研』54-1, pp. 367–374)

川村 悠人 2011 「*Meghadūta* における反復表現—ヴァッラバデーヴァとマッリナータの解釈—」(『哲学』第 63 集、pp. 129–141)

引田 弘道 2005 「アショーカ王物語 (その二)—『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第 73, 74 章—」(『人間文化』[= 愛知学院大学人間文化研究所紀要]、第 20 号、pp. 353–347)

山崎 一穂 2002 「中世インドの仏教説話—*Avadānakalpalatā* 及び *Aśokāvadānamālā* 所収「ウパグプタのマーラ調伏物語」—」(『比較論理学研究』第 10 号、pp. 23–64)

—— forthcoming "On Kṣemendra's Version of the Nāgadūtapreṣaṇa," (『印仏研』 63-3, 掲載頁未定)

横地 優子 2008 「サンスクリット詩の理解に向けて」(『多言語社会における文学の歴史的展開と現在: インド文学を事例として』平成 17 年度—平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書 [研究代表者: 水野善文] 所収、pp. 101–114)

(やまさき　かずほ、日本学術振興会特別研究員 [インド哲学])

Sanskrit Poetry and Hymns: Bhāravi's *Kirātārjunīya* 18.22–43

Kazuho Yamasaki

The *Kirātārjunīya* or *Arjuna's Combat with the Mountain Tribe* by Bhāravi (ca. mid-sixth century C.E.) is a classical Sanskrit epic in eighteen chapters. Verses 22 to 43 of the last chapter of this work are devoted to a hymn in praise of Śiva. The most arresting feature of the hymn is that Bhāravi uses a figure of speech called *yamaka* or "chime" in eleven out of twenty-two verses. Although many studies have been conducted on Hindu, Buddhist, and Jain hymns, little attention has been paid to figures of speech used by hymnodists. Taking the hymns of Mātṛceṭa (before the fourth century C.E.) and that of Mayūra (mid-seventh century C.E.) into consideration, this paper has examined the features of the *yamaka* in the *Kirātārjunīya* 18.22–43.

The results were as follows:

(1) In the *Kirātārjunīya* 18.22–43, only three out of eleven examples of *yamaka* conform to the rules of *yamaka* as established by poetic theorists. The rest are classified into pseudo-*yamaka*. This is true for Mātṛceṭa's hymns as well. It should be noted, however, that while Mātṛceṭa breaks grammatical rules in several cases, Bhāravi never does. It is thus likely that the practice of composing hymns in conformity with prescriptive grammar prevailed among hymnodists from around the fifth century C.E. onwards.

(2) The examples of *yamaka* in Mayūra's *Sūryaśataka* are more elaborate and faithful to poetic rules than those in the *Kirātārjunīya* 18.22–43. Interestingly, however, Mayūra uses *yamaka* in only one out of 101 verses. This fact suggests that *yamaka* went out of use in hymns by the middle of the seventh century C.E.

It is reasonable to suppose that one of the reasons that the *Kirātārjunīya* gained widespread popularity among both Indian and Western critics is that Bhāravi preferred to convey clear meanings in his verses instead of constructing a faultless *yamaka* at the cost of meaning and grammatical rules.

The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic 12 (2015): 97–133.
email: kazuho.yamasaki@gmail.com